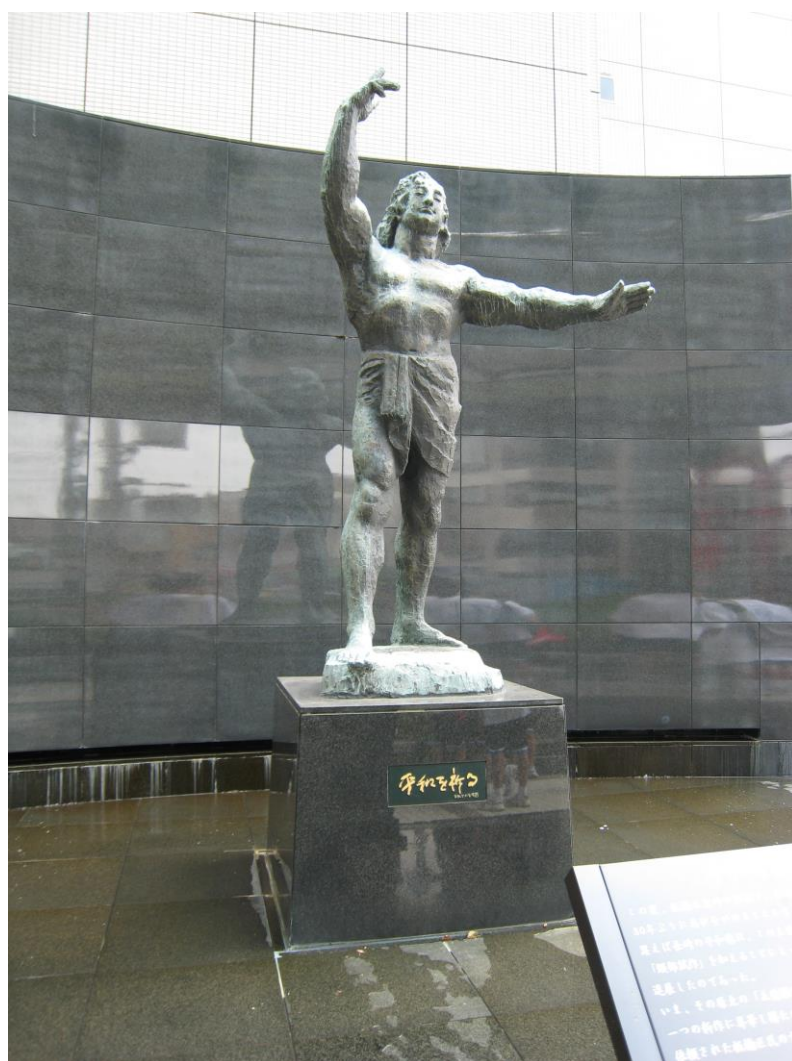


板橋区平和都市宣言記念事業
令和6年度 板橋区中学生平和の旅
感 想 文 集



板橋区役所正面玄関前 平和祈念像／北村西望 作

板橋区平和都市宣言記念事業実行委員会
(板 橋 区 ・ 板 橋 区 議 会)

板橋区平和都市宣言

世界の恒久平和を実現することは 人類共通の願いである
しかるに 現実には 核軍拡競争が激化の様相を示し 人類
の滅亡さえ危惧されるところである

われわれは 世界で唯一の核被爆国民として また 日本
国憲法の精神からも再び広島 長崎の惨禍を絶対繰り返して
はならないことを強く全世界の人々に訴え 世界平和実現の
ために 積極的な役割を果たさなければならない

板橋区及び板橋区民は 憲法に高く掲げられた恒久平和主
義の理念に基づき緑豊かな文化的なまちづくりを目指すとし
てもに 非核三原則を堅持し 核兵器の廃絶を全世界に訴え
平和都市となることを宣言する

昭和60年1月1日

板 橋 区

ごあいさつ

板橋区は、昭和60年1月1日に世界の恒久平和を願い、非核三原則を堅持し、核兵器の廃絶を全世界に訴える「板橋区平和都市宣言」を行いました。以来、この宣言を実りあるものとするため、現在に至るまで様々な平和都市宣言記念事業を実施し、「戦争の悲惨さ、平和の尊さ」を訴え続けています。

「中学生平和の旅」は、『次世代を担う子どもたちに平和の大切さを伝える』ことを目的に実施しており、今年度も被爆地である広島及び長崎に区立中学生を各22名、計44名を派遣しました。この感想文集は、平和の旅を通して学んだ貴重な経験と、現地を感じたそれぞれの「平和への思い」を自分自身の言葉で綴ったものです。

戦後79年が経過した現在、世界にはいまだ多くの核兵器が存在し、新たな兵器の開発も進められています。戦争による悲惨な体験を知らない世代が大半を占めるなか、この感想文集を一人でも多くの方にご覧いただき、「平和の尊さ、大切さ」に対する認識を深め、あらためて「平和」について考えるきっかけにいただければ幸いです。

板橋区は、「SDGs 未来都市」として、全ての国が取り組むべき普遍的な目標であるSDGs（持続可能な開発目標）の理念を見据えつつ、平和都市宣言記念事業を積極的に推進し、世界の恒久平和を実現するため、様々な機会を捉えて「平和の心」を発信してまいります。

最後になりましたが、本事業の実施にご協力いただきました、関係者の皆様方に心より感謝申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

令和6年11月

板橋区長

坂本 健



目 次

ごあいさつ	1
第1部 中学生広島平和の旅	
1. 行程表	4
2. 団長感想文	5
3. 参加中学生感想文	6
第2部 中学生長崎平和の旅	
1. 行程表	29
2. 団長感想文	30
3. 参加中学生感想文	31
第3部 資料編	
1. 広島	
(1) 広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式次第	54
(2) 平和宣言	56
2. 長崎	
(1) 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典実施要領	58
(2) 長崎平和宣言	59

■広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式出席議員

中 村 とらあき	議員	内 田 けんいちろう	議員
いしだ 圭一郎	議員	さかまき 常行	議員
五十嵐 やす子	議員		

■長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典出席議員

横 川 たかゆき	議員	近藤 タカヒロ	議員
わたなべ 一美	議員	いがらし 学	議員
くまだ 智子	議員	いわい 桐子	議員

第1部

第28回 中学生広島平和の旅



【参加生徒】

板橋第一中学校	佐藤 寿里	志村第四中学校	宇田川 花葉	桜川中学校	水島 凜子
板橋第二中学校	森 千夏	志村第五中学校	飯塚 杏奈	赤塚第一中学校	伊藤 結莉菜
板橋第三中学校	YASYNSKA VIKTORIA	西台中学校	平山 元稀	赤塚第二中学校	原 環希
板橋第五中学校	村瀬 由衣	中台中学校	小田 結衣子	赤塚第三中学校	高瀬 莉空
加賀中学校	土田 咲仁	上板橋第一中学校	水町 俊介	高島第一中学校	鬼澤 侑里
志村第一中学校	風間 莉希	上板橋第二中学校	森垣 美由紀	高島第二中学校	能智 心海
志村第二中学校	坂本 瀬奈	上板橋第三中学校	佐々木 栞	高島第三中学校	亀浜 朝琉
志村第三中学校	南 大地				

【引率者】

上板橋第一中学校 長岡 直行校長（団長） 小玉 智久教諭（指導員） 小川 瑞穂教諭（指導員）

中学生広島平和の旅 行程表

実施期間 令和6年8月5日～7日（2泊3日）

8月5日(月)	
時 間	行動内容
7:00	板橋区役所集合・出発式
7:30	板橋区役所 発(都営地下鉄、JR)
8:03	東京駅 着
8:30	東京駅 発(新幹線)
12:30	広島駅 着
12:50	広島駅 発(市電で広島市役所へ)
13:20	広島市役所 着
13:30	★ヒロシマ青少年平和の集い受付
	★開会式(開会挨拶、参加自治体紹介)
14:00～17:00	★平和学習会(被爆体験講話、ワークショップ、発表)
	★閉会式
17:20	ホテル 着
19:00	夕食
22:00	就寝
8月6日(火)	
時 間	行動内容
5:00	起床
6:00	朝食
7:00	ホテル 発(徒歩)
7:10	平和記念公園 着
8:00～8:55	平和記念式典参列
9:30～14:00	市内見学(観光バス)・昼食
15:00	ホテル 着
16:00～17:30	班学習会
18:00	夕食
19:00	灯籠流し体験
22:00	就寝
8月7日(水)	
時 間	行動内容
6:00	起床
7:00	朝食
8:20	ホテル発(徒歩)
8:30	平和記念公園 着(献花)
9:00～11:20	国立原爆死没者追悼平和祈念会館等見学
11:30	平和記念公園 発(観光バスで広島駅へ)
11:50	広島駅 着
12:35	広島駅 発(新幹線)
16:30	東京駅 着(JR、都営地下鉄)
17:20	板橋区役所着・解散式
★はヒロシマ青少年平和の集い事業(広島市主催)	

語り継ぐことの大切さ

第28回中学生広島平和の旅
団 長 長 岡 直 行
(上板橋第一中学校長)

8月5日から7日までの3日間、板橋区立中学校の派遣生徒22名とともに、中学生平和の旅で広島を訪れました。酷暑の中、参加した派遣生たちは、事前学習で深めた内容を現地で「見て・聴いて・肌で感じる」ことを一生懸命に実践しました。

私たちは、初日、広島に到着してすぐ、「ヒロシマ青少年平和の集い」に参加しました。被爆体験証言を聴き原爆によって今までの生活が一瞬にして大きく変化したこと、生き残ったとしても不安を抱えながら生きた人々の大変さや悲惨さを聴くことができました。その後、全国から集まった小学生から大学生とのディスカッションをしました。「戦争をどう伝えるか」、「核兵器をなくすために何ができるか」などそれぞれが感じたことを話していました。これからの日本・世界をどのようにしていかなければならないのかを認識させる内容でした。

2日目の8月6日には、広島市原爆死没者慰霊式並びに平和記念式に参列し、79年前に原爆を投下された時刻の8時15分に黙祷を捧げました。特に、子ども代表による「平和への誓い」は、大きな感銘を受けました。「目を閉じてください。緑豊かで美しいまち。人でにぎわう商店街。まちにあふれる沢山の笑顔。79年前の広島には、今と変わらない色鮮やかな日常がありました。(中略)今もなお、世界では戦争が続いています。79年前と同じように、生きたくても生きることができなかった人たち明日をともに過ごすはずだった人を失った人たちが、この世界のどこかにいるのです。本当にこのままでよいのでしょうか。願うだけでは、平和は訪れません。色鮮やかな日常を守り平和をつくっていくのは私たちです。(中略)世界を変える平和への一歩を今、踏み出します。」という熱いメッセージを伝えてくれました。この式典に参列し「戦争の悲惨さ」、「平和の尊さ」、「命の大切さ」を改めて感じることができました。夜は、平和のメッセージとして灯籠流しを体験しました。

最終日は、爆心地の見学、平和記念公園内にある原爆の子の像へ千羽鶴の奉納や「安らかに眠って下さい 過ちは繰り返しませぬから」と書かれた原爆死没者慰霊碑への献花などを行いました。その後、広島平和記念資料館を見学し、資料や展示品などを鑑賞しました。中には、数多くの資料を懸命に撮影している派遣生の姿は、何かを伝えなければならないという熱い思いを感じることができました。

派遣生たちは、平和の旅で学んだことを「板橋平和のつどい」やそれぞれの学校の生徒に発表することになります。これらの発表を通じて派遣生が広島で「見て・聴いて・肌で感じたこと」をできるだけ多くの人に伝えてくれれば、今回の平和の旅の成果は、十分に成し遂げられたと思います。

平和を築く

板橋第一中学校 8年 佐藤 寿里

今を生きている私たちにとって平和な日常が当たり前になっている中、もし突然原子爆弾が降ってきたら…。私は広島のことについて調べ始め、それを一番最初に思った。実際に広島に地へ原子爆弾が投下されたのは、今から 79 年前の 1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分。皆がそれぞれの 1 日を始めようとしている時だった。

今年で被爆者の平均年齢は 85 歳。年々高齢化が進んできており、当時の話を被爆者の方に聞く事が出来るのもあと十数年と限られてきている。しかし、私はその十数年のうちに核兵器が完全に無くなるとは思えない。今も世界には戦争があるからだ。核兵器廃絶を進めるため、核の危険性や 8 月 6 日に起こった出来事をもっと世界中に伝える必要があると思った。これからの未来を創っていく私たちが、その役割を果たさねばと思いこの広島平和の旅に参加を決めた。

1 日目の青少年平和の集いでは、当時 8 歳で被爆した山瀬潤子さんの体験談を聞いた。被爆当時、いとこの香さんは爆心地から約 1km 離れていたにもかかわらず、1 つの遺骨も残らなかったそう。山瀬さんの周りにはひどいやけどを負った人や皮膚がただれ両手を下ろせない人、皮膚についた粉塵を取ろうとすると一緒に皮膚が剥がれ落ちる人などがいたそうで、話を聞くだけでも痛々しかった。

2 日目の平和記念式典では、こども代表の 2 人が重みのある大きな声で平和への誓いを宣言していた。特に「願うだけでは、平和はおとずれません。色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。」という言葉が強く心に残った。

また 8 時 15 分に行われた黙祷では、この一瞬で幸せだった日常が一変してしまったと思うと、もう 2 度と同じ過ちは繰り返させない。と強く決心をする瞬間になった。

その夜の灯籠流しでは、外国人の方も多く、ここにいる皆で国境や言語の壁を超えて平和を築いていけたらいいなと思った。

3 日目には原爆ドームを見たり、爆心地を見に行ったり、平和記念公園の慰霊碑の前に献花をさせていただいた。慰霊碑に刻まれた「安らかに眠ってください 過ちは繰り返しませぬから」この言葉を見たとき、ここにいる死没者の方々の想いが詰まっていると思うと涙が零れそうになった。その後の原爆資料館の見学では、被爆した物や服、当時の写真がズラリと並んでいた。最後まで展示を見るだけでもとても怖かったし、辛かった。顔を伏せてしまう時もあったけれど、今まで知らなかった原爆の惨状をしっかりと頭に刻みこんだ。

現地で学んだことを活かし、被爆者の想いを伝え、繋いでいく。これは今回広島に行った私たちに託された使命だと思う。これからの世界恒久平和のため、私たちは 8 月 6 日に起きた出来事を伝え続けていく。

～平和を伝える為に～

板橋第二中学校 8年 森 千夏

私は、第79回目の平和記念式典に参加するために広島へ行ってきました。宿泊するホテルまで歩いた道では、たくさんの住宅や、お店、人を目にしました。その光景からは79年前は地獄のような光景が広がっていたとは到底想像もつきませんでした。

広島平和記念資料館の前では、平和の灯火が暑い日差しの中力強く燃えていました。この火は平和を誓う火なので、雨が降っても消えないようになっていました。

広島平和記念資料館では、当時の人が身につけていた被爆した洋服や三輪車などの現物が展示されていました。今の広島からは全く想像できないような当時の状況説明が詳しく書かれた看板や、被爆した人たちの最後の言葉などをみて、涙が止まりませんでした。

ヒロシマ青少年平和の集いに参加したときには、被爆した方のお話で、「これからは一人一人がお互いのことを理解はできなくても、知ることが大切。お互いのことを知る勇気が出ない人も、理解しようと行動に移すことが大切」ということを聞き、とても心に残りました。

被爆した当時今後70年は草木が生えないと言われていましたが、被爆した木々から新たに芽をはやしていききました、その木々のことを被爆樹林というと被爆者の方は言っていました。それを聞き

また、原爆の悲惨さと平和の尊さを伝えていくために中学生・高校生が自主的に集まる「中・高校生ピースクラブ」というものがあります。「平和の尊さ」を伝えていくには、次の世代に引き継いでいかななくてはならない。と話しているのを聞いて、今回の旅で学んだ「平和の尊さ」を多くの人に伝えたいと思いました。

私はこの旅に参加して、たくさんのことを知っていくうちに次のようなことを考えるようになりました。それは「戦争があったからこそその平和がある」です、戦争は絶対にしてはいけないものです、確かに戦争があった、辛いものだった、と個人個人が思っているだけでは戦争は減らないですが、このようなヒロシマ青少年平和の旅やピースクラブ、様々な形で戦争の残酷さを発信しています。こうすることで皆の戦争への意識が変わります、戦争を起こさないために、核兵器を減らすためにどうすればいいかと考えるようになります、人は過ちから学んでいく生き物だと私は思います戦争という大きな過ちから学んだからこそその平和だと思います。

平和の尊さとは、人との協力が大切だと思います。なので私は、いろいろな人と協力して、何かを成し遂げることの大切さを知ることが、平和の尊さを伝えるための第一歩になると思います。

子孫に平和を

板橋第三中学校 8年 ヤシンスカ ヴィクトリア

幸運なことに、平和の旅中は晴天に恵まれましたが、とても暑かったです。それにもかかわらず、私と他の参加者はできる限り多くのことを調べて学ぼうと努めた。

初日の平和の集いは、8月6日の原爆投下が実際にどのようなものだったのか、そしてこの恐ろしい悲劇を生き延びた人から、その後の生活がどうだったかを聞くチャンスでした。平和の集いではグループディスカッションも行いました。グループの各人は異なる県または市の出身でした。それぞれの地域の戦争体験について話し合うとともに、その体験をどのように共有していくべきかを考えました。確かに多くの地域が戦争中に独自の体験がありましたが、そのうちのいくつかは人々に全く知られていないため、ドキュメンタリーや映画を制作し、ソーシャルメディアに戦争のことを投稿したり、色々イベント行いたりするアイデアを思いつきました。2日目の早朝、私たちは平和記念式典に参加しました。8時15分ちょうどに1分間の黙祷が捧げられました。その瞬間、原爆で亡くなったすべての人々の存在、子供や大人が泣いている様子、水を探している様子、そして彼らの痛みを肌で感じられました。その一分間、人生で経験したことのない感情の混乱の中で、泣かずにはいられませんでした。灯籠流しのときも、3日目に亡くなった人全員を偲んで花を捧げたときも、同じような感情の混乱がありました。亡くなった人がいつも私たちのためにそこにいて見守ってくれているのは明らかでした。21世紀の今でも平和を維持できない私たちに怒っているにちがいません。この3日間と平和記念資料館の訪問を経て、私は戦争とは夢を持ったひとびと、動物、そしてあらゆるものが死ぬ生き地獄以外の何ものでもないと理解しました。

これからは、戦争について人々に伝えることに全力を尽くします。地球上で平和を保つことがいかに大切かを理解してもらい、私たちのために亡くなった先祖を失望させず、私たちの子孫が憎しみに満ちた世界で暮らすことを許しません。



平和への祈り

板橋第五中学校 8 年 村瀬 由衣

今から 79 年前の 1945 年 8 月 6 日 8 時 15 分。それぞれ多くの方がいつもの日常を過ごしていた時、1 つの原子爆弾によってその日常が一瞬にして破壊されました。爆心地の近くにいた人は何が起こったかすらも理解する前に亡くなりました。生き残った人も原爆症により白血病などの身体的な病気に加え、心にできた大きな傷により苦しんでいました。

私は 8 月 6 日、そんな方々を慰め、世界の恒久平和を願うことを目的とした平和記念式典に参列した際、平和への誓いにて聞いた小学 6 年生の加藤晶さんと石丸優斗さんの「願うだけでは、平和はおとずれません。」という言葉が心に残っています。今回の平和の旅で戦争の悲惨さがわかったとしても、これからの世界の平和に向けて行動に移していかないと意味がないということを改めて気付かされたからです。また、私達にできることがどれだけ微力だったとしても、平和を求めて行動していけばいつかの世界中の平和につながるということにも気付かされました。

原爆ドームという建物は原爆の恐ろしさを後世に伝えていくために残された建物です。原爆ドームを残すにあたって被爆者の方々はあの日を思い出して辛いから残さず壊してほしいという声も上がりました。けれどそれでもこれからの未来が平和であるために、原爆について忘れないために残すことになりました。平和記念公園には原爆の子の像という像があります。原爆の子の像は佐々木禎子さんという被爆から 10 年後に白血病と診断され、八ヶ月の闘病生活の末亡くなってしまった少女をモチーフに作られ、原爆で亡くなった多くの子供を慰め、世界に平和を訴えかけるために作られました。佐々木禎子さんの同級生が募金活動を通し完成させた像です。これら以外にも広島市には平和記念資料館などたくさん原爆に関する建物があり、それらは原爆の恐ろしさを、戦争の悲惨さを感じさせるものばかりでした。沢山の人の苦悩があった上でできたこれらの建物などを通じて学んだことを使い、未来の世界平和に向けて行動していこうと考えました。

3 日間の広島平和の旅を通して現在、学校に通い、栄養バランスの取れた食事を食べ、友人と笑い、趣味に没頭することができるということは当たり前ではなく、いつ壊れてもおかしくない儚く、尊いものだと思えることができました。私は被爆者の方や人生の先輩方が残して下さった教訓や平和について考えたことを伝えていくことが私にできる世界の平和に向けての一歩だと考えました。今、世界には約 12121 個の核兵器が存在します。学校や身近な人に核兵器の恐ろしさを、平和の旅で学んだことを伝えていき、いずれは世界中で 1945 年 8 月 6 日の出来事を、核兵器について知らない人がいないように、広める努力をすることが私達にできることだと思います。

広島に行って

加賀中学校 8 年 土田 咲仁

私は広島平和の旅で、平和の大切さ、戦争の恐ろしさについて学び、これから自分は何をすればよいのか考えることができました。

一日目、私達は東京から広島に行きました。今から 89 年前、原爆により一瞬にして地獄となった街とは思えないような光景が広がっており、私はかつて原爆が投下された地だと全く想像することができませんでした。

午後にはヒロシマ青少年平和の集いに参加しました。そこでは被爆体験者の山瀬さんのお話を聞き、ここで初めて広島に来て戦争の恐ろしさを実感することができました。グループディスカッションでは、違う視点から考えている人の意見を聞くことで、考えを深めることができました。

二日目、早朝に平和記念式典に参加しました。たくさんの国から式典に参加しに来ている人がいました。他の式とは違う独特な雰囲気でした。

私は湯崎英彦広島県知事の言葉の「人類が発明してかつて使われなかった兵器はない。禁止された化学兵器も引き続き使われている。核兵器もそれが存在する限り、必ずまた使われることになる。核廃絶は遠くに掲げる理想ではない。過ちは繰り返させぬからという誓いを私達は今一度思い起こすべきではないでしょうか。」というのがとても印象に残っています。私はこの言葉を聞いたとき、核廃絶についてもっと必死に取り組むべきだということを改めて感じました。岸田文雄内閣総理大臣や松井一実広島市長、子供代表の二人、アントニオ・グテーレス国際連合事務総長の言葉なども聞き、貴重な体験になりました。

夜には灯籠流しに参加し、平和への願いを紙に書いて流しました。大勢の人々が参加していて川がとてもきれいに光っていました。

三日目、平和記念公園と平和記念資料館に行きました。公園ではバスガイドさんが建物一つ一つ丁寧に歴史やなぜ建てられたのかなどを詳しく教えてくれました。資料館では、原爆に被爆した当時の写真や絵、影が残っている壁などが載っており、想像を絶するものでした。私は被爆した人の頭蓋骨が並べられている写真が、現実のものなのか疑ってしまうもので一番恐ろしかったです。

この旅を通して、私は平和についてあまり考えたことのない自分から考えている自分に進歩することができたかなと感じました。そして、被爆体験者の山瀬さんのお話を聞いたことや、原爆資料館に展示されているものを見たことによって、より、今世界で起きている戦争が一刻もはやく終わってほしいことと核爆弾の廃絶が進んでほしいと思いました。

広島を訪れて改めて感じた“当たり前の貴重さ”

志村第一中学校 8 年 風間 莉希

「今の生活は当たり前だ。」そう感じる人は多いのではないかな。
しかしそれは 79 年前では当たり前ではない、“貴重”なのだ。

私はこの夏、中学生広島平和の旅に参加した。8 月 5 日、この日は他県の小中高校生と共にヒロシマ青少年平和の集いに参加した。そこで被爆体験者である、山瀬潤子さんからお話を聞いた。1945 年 8 月 6 日、この日は快晴だったという。そしてその時はきた。8 時 15 分アメリカ軍によりひとつの原子爆弾が投下された。投下後 1 分も経たないうちに原爆が炸裂した。そのときの閃光と爆音を用いて“ピカドン”とも呼ばれる。一瞬にして広島は一変してしまったのだ。このお話を聞いてとても胸が苦しくなった。そして改めて原爆の恐ろしさを感じた。

この平和の旅の期間中、私はふと思った。「早く平和の旅終わらないかな、」と。なぜこのように思ったのか、はじめは分からなかった。しかしよくよく考えてみれば、今回の平和の旅というのは参加者全員がお互いを知らない中で家族と離れ、3 日間をともに過ごすというものだ。今、振り返るとホームシックになっていたことに気づく。このときの私は家族と一緒に生活がしたかっただろう、友だちと遊びたかったのだろう。けれど 79 年前は、ひとつの原子爆弾によって多くの人が家族や友だちを亡くし、いつもの暮らしが奪われ、明日を生きることで精一杯であったであろう。現代の私たちには決して感じたことのない当時の絶望や悲しみ、苦しみを想像すると、胸が締め付けられる思いである。

この旅を通して私は、家族の大切さに改めて気付かされた。家族というのは他とは比にならないほど強い繋がりがあり、それは他人にはそう簡単に引き裂けない。だからこそ私はよりいっそう家族がいることは当たり前ではなく貴重だということを忘れずに生活していきたいと思う。

最後に私は平和とは、世界中の人々が普通の生活ができることだと考える。それは誰一人も取り残してはいけない。そのため今の世界は平和ではないと私は思う。普通の生活をしている私たちがいる一方で生活が奪われ、日々おびえながら生きている人々がいるからだ。このままでは世界は何も変わらない。この世界を変えるには人々の理解が必要だ。そのために世界唯一の被爆国である日本に住む私たちはより平和についてひとりひとりが向き合い考えるべきだと思う。

さて最初に私は「今の生活は当たり前だ。」と感じる人は多いのではないかなと言った。この感想文を読んでくださっている、そこのあなたは今の生活が当たり前だと感じるのか、もう一度考えてみてほしい。

平和に向けて

志村第二中学校 8年 坂本 瀬奈

想像してみてください。起きて、食べて、学んで、遊んで、食べて、寝る、そんな当たり前の生活が戦争によって奪われ、目の前に広がる光景は、火の海となる街と助けを求める声が響き渡る1945年8月6日の広島を想像してください。原爆が落とされた瞬間、広島の人々は何を思ったのでしょうか。家族のこと、友人のこと、明日への希望。全てが一瞬にして消え去る中で、彼らの心にはどんな感情があったのでしょうか。

私は今回の広島平和の旅で改めて戦争の恐ろしさと命の尊さを実感しました。この旅では最初に、「ヒロシマ青少年平和の集い」に参加します。そこで被爆者の山瀬潤子さんのお話をきかせていただくことになりました。山瀬さんは8歳のときに原爆を体験しました。山瀬さんは「いとこ2人を原爆症でなくした」とおっしゃっていました。私は、その一言に胸が締め付けられる思いがしました。この一言からなんの前触れもなく、日常生活を送っていたその瞬間に、全てを奪われてしまった、彼らの悲しみや苦しみを想像することができました。山瀬さんのお話の最後には「戦争をなくすためにできることははっきりとはここではいわない。行動力を大切にして、自分から行動してほしい」とおっしゃいました。私は、そのとき託されたんだと思いました。現在、被爆者の平均年齢は85歳を超えています。被爆体験者の風化を叫ぶ声もテレビや SNS でよく見ます。つまり、私達が被爆体験者のお話を語り継いでいくことが私にできる戦争をなくすための行動の1つだと思いました。いつかは、被爆者がいない未来がきてしまいます。その未来は遠くない話でもあります。私達はその未来とどう向き合っていくことが大切なのか、これは私達が抱える問題の一つだと思います。そして、2日目は平和記念式典に参加しました。そこで聞いた平和の誓い「願うだけでは、平和はおとずれません。色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。」この言葉は私の心に深く残りました。この言葉は、私が平和のための行動を起こす時、心の支えと行動に移す大きなきっかけになるからです。また、平和の誓いでは「今もなお、戦争は続いています。79年前と同じように、生きたくても生きることができなかった人たち、明日を共に過ごすはずだった人を失った人たちが、この世界のどこかにいるのです」このようなこともおっしゃっていました。この時の私は平和は、当たり前にあるものではないことに気付かされました。

最後に、平和記念資料館を訪れた際に熱線と放射線によって苦しみながら亡くなる人々を見ました。その中には遺族の方の言葉とともに展示されているものもありました。遺族のお言葉には亡くなってしまった方への愛の気持ちや親が子を思う気持ちが詰まった文が多く残されていました。私は平和である日々を当たり前と受け止めず、平和であることに希望を持ち生きていくことが私達にできる平和への一歩だと思いました。

平和の大切さを伝えたい

志村第三中学校 8年 南 大地

過去、近代化を急ぐ日本が、富国強兵策により軍備を拡張し近隣諸国への侵出を企て起こした太平洋戦争。戦争という過ちを再び繰り返さないために、この広島の旅で見て・聞いて・経験したことを伝えていきます。

8月5日(月)平和学習会に参加した私は「核兵器を無くしていく為に、自分たちにできることは何ですか」と被爆者体験講和会で問いかけられました。当時の広島の様子を当事者から聞くことで広島原子爆弾の投下はより悲惨であったことが理解できました。私は過去に太平洋戦争・沖縄戦の様子を学んだ事があります。しかし広島原子爆弾の威力・被害はより深刻なものでした。原子爆弾が投下されその火の粉から避難する様子、食べ物がなくて空腹に耐えられず水で溶かした新聞紙を食べていたと聞いたとき、僕は同じ立場に立って考えることができるのだろうかと思いを巡らせた。争いは不幸しか生まない。とにかく話し合いで解決が必要であり、話し合いで解決できない場合には仲裁者を探す必要があるのではないかと考えました。

8月6日(火)平和記念式典に参加しました。そこで、松井広島市長は「混迷を極めている世界情勢をただ悲観するのではなく、先人たちを同様に決意し、希望を胸に心を一つにして行動を起こしましょう。」と呼びかけました。僕はこの言葉を頭で考えるだけでは意味がない、僕たちが行動することに意味があるのではないかと考えました。海外からの参列国も多く、記念式典の会場外でも黙祷をささげている方々が印象的でした。世界中の人がこの広島に落ちた原子爆弾の被害について関心があるのだと思った反面、なぜ核兵器を保有する国が存在するのだろうかという疑問が生じました。

8月7日(水)平和記念資料館を見学しました。私は、被爆者と同じ経験をすることはできません。「過ちをくりかえしませんから」と誓ったはずなのに、世界のどこかでは戦争が繰り返されている現状です。今一度思い起こし伝えていくことが重要だと考えました。戦争を「誰にも二度と同じ苦しみを味わってほしくない」という強い思いにかられた被爆者の方たちの遺言などに掲載されており、平和の旅の参加者同士で意見交換を実施しました。

今回の広島平和の旅では調べ学習では学習できない事を経験しました。いずれも多くの人が味わった苦しい体験を想像し深く考えることができる機会でした。私はこの原爆での被害を詳しく知るものとして、平和の尊さ、大切さをこれから先一人でも多くの人に伝え、「争いは二度と起こしてはならない」という課題に目を向けて更に自分の中でどう行動していくべきか考えます。

願いではなく実現を

志村第四中学校 8年 宇田川 花葉

原爆投下から79年。私達の世代は戦争を経験していない。だから、他人事にしていいいのだろうか。私はこの残酷な事を他人事にはいけないと重々思う。

私達は実際に原爆が投下された地、広島に足を運んだ。平和記念資料館や被爆者の方の話など衝撃を受ける事実がたくさんあった。平和記念資料館では軍事服やお弁当箱、街全体がぼろぼろになってしまった様子が展示されていた。原爆の威力がどれだけ強いのがよくわかった。そして、原爆症の方々の写真、家族への手紙、原爆投下当時の人々の絵や写真があった。私はそれらのものを見て、何も言えなかった。あまりにもショックを受けたからだ。展示物を見るだけでとても苦しくなる。展示物を見ただけでこれだけ辛くなってしまったのだから実際にその場にいたらどうなっているのだろうか。私であれば、悲しいや苦しい、辛いという感情が混ざり生きていけなくなってしまうだろう。実際にその時は地表温度が最高で3000度から4000度に達したという。熱線や放射線、爆風はとても酷かったという。熱くて熱くて人々は水を求め川へ入ったそうだ。川には沢山の人で溢れていた。川に入れなかった人は黒い雨という放射線を含んだ雨を大きく口を開いて飲んでいて。それに人々は原爆により皮膚がただれ目玉が落ちてしまうなど、悲惨であった。そんな状況、地獄でしかない。何も悪くない国民はなぜこんなにも地獄を見させられないといけいいのか。ここでは原爆の事について挙げたが他にも東京大空襲や沖縄の地上戦など民間の人たちがたくさん亡くなった出来事は様々ある。戦争をやったことによって沢山の人が苦しい思いをしてなくなってしまった。こんな事良い訳がない。だから戦争はやってはいけないのだ。

それでは、今後日本ではどう過ごしていくべきなのか。それがヒロシマ青少年の集いや平和式典などに参加することだと思う。つまり、戦争という残酷なことを繰り返さないために半世紀以上前の日本ではどのようなことが起こったのかという知識を得ることだと思う。今回、ヒロシマ青少年の集いに参加して被爆者の方の話を聞いた。資料館に書いてあることよりも詳しい話を聞くことができた。それに原爆ドームや爆心地など原爆の恐ろしさを伝えるものが残っていることにより戦争を二度と繰り返さないという考えが改めて理解できた。そして、平和の鐘や原爆の子の像、灯籠流しのような平和を願う物事があり、世界が平和になってほしいと重々思う。ただ、平和になってと願っても他人事のように聞こえる部分もある。だから今回、平和学習で学んだことを学校や家族の中で発表することが、私達ができる活動だと思う。沢山の人たちに戦争と平和を伝承し日本、世界全体が平和に向かっていくことを実現したい。

「行動」が平和への一步

志村第五中学校 8年 飯塚 杏奈

小学生から戦争について調べ学習を通し平和について考える学習をしてきた。だが、その中で自分は本当に今の世界情勢や戦争のことを何も知らないと感じるようになった。これからの社会を担っていく世代の一人として、「原爆の悲惨さ」を知るべく、被爆された8月に広島へ足を運んだ。

初日は被爆者の女性からお話を伺った。その女性の家族は重症を負ったとはいえ、奇跡的に全員が助かったという。だが、それを同じく被爆を経験した人に話すと「あなたの家は誰も死ななかったの?」と、とても驚かれたそう。私はその言葉がとても心に残った。原爆によってたくさんの命が吹き飛んだということは知ってはいたが、どの家族も欠けてしまう、無くなってしまうということが至極当然のように告げられているように感じてしまい、改めて原爆の悲惨さを痛感したからだ。私には家族がいて、家に帰れば「おかえり」と迎えてくれる。私の日常はこんなにも温かかったのだ。

ヒロシマの集いでは、各地の中高生と、核兵器のことや戦争の恐ろしさについて意見を交わすことができた。そこで、ある一人が教えてくれたことが印象に残っている。それは、海外ではあまり核兵器の恐ろしさを日本のように教わっていないという事実だ。また、日本に原子爆弾を投下したことは善い選択だったと教育をするところもあるそう。それが現状なら、世界の人々は原爆の本当の悲惨さを知ることができない。だから、被爆国である日本が核兵器の本当の恐ろしさを世界に発信しなくてはならないと改めて分かった。

最終日、平和記念公園の中にある「平和の灯」を見た。核兵器がこの世界からなくなるまで燃え続ける灯だ。「私が生きている間に消すことはできるだろうか」と思った。だが、じっと見ていると、その灯にどこかたくさんの願いが詰まっているように感じた。その願いは、被爆をして命を奪われてしまった人やその家族、今も後遺症や心を苦しめられている人たちのものだろう。平和は願っているだけでは訪れない。核兵器がもたらす被害がいかに悲惨で、残虐的なのかを今回の旅で痛感した。これを世界に伝える義務が、私達にはある。戦争は行っちゃいけない。核兵器を使用してはならない。言葉では簡単に言えるが、それを実現させるには「行動」が必要だ。もうこれ以上過ちを繰り返さないために、核なき世界を実現させるために、まずは周りの人に、そして世界の人々に日本でおきた原爆投下の現状を伝え、ともに原爆資料館を訪れたり、平和に関するイベントに積極的に参加したりしていきたい。更に今の世界情勢や戦争の歴史について興味を持ち、正しい知識を深めていきたい。

未来を担う僕たち

西台中学校 8年 平山 元稀

今回実際に平和の旅に参加してみてこの旅の必要性を知ることができた。

僕は平和の旅に立候補しようと決めるまで戦争のことにあまり知識は無かったが平和の旅の事前学習で戦争について調べていくうちに戦争の残酷さを知っていった。

そして実際に広島へと足を運んでみると、被爆者の方がその時の感情などまで詳しく話してくれたり、平和祈念記念式典や灯籠流しなど平和を願う行事に参加したりして、インターネットでは知れなかったことも知ることができ、これまで以上に戦争に関心を持つようになった。また同年代の人と戦争について話し合う機会があった。その話し合いには近くの千葉県の人から、沖縄の人まで様々な地域の人に来ていた。それぞれの地元での被害や核について意見を共有して、地元の戦争のことをどのように感じているか、日本の戦争での被害は、計り知れないものであるということを理解する事ができた。

ただ被爆から八十年近くたった今の日本では、戦争への意識が薄れつつある。特に僕らのような若い世代にだ。

しかしこれからは僕たちが日本の未来を担っていく。そんな人達が戦争について無関心でいいのだろうか。現在被爆者の平均年齢は八十五歳を超えている。それでも被爆者の方たちは、僕らに戦争の恐ろしさを伝え、もう戦争が起こらないために活動をしている。この人たちの思いを、尊重したいと僕は思っている。ただこのような形で被爆者の話を聞ける機会は、段々と減ってきている。それは仕方のないことである。しかしそれを仕方ないだけで終わらせてはいけないと思う。機会が少ないのなら、その貴重な機会をもらえた人が他の人に伝えればいいのではないかな。僕はこの旅で、そんな貴重な機会をもらうことができた。僕が聞いたり体験したりしたことを、学校の友達や地域の方々に伝えることができれば、被爆者の方たちの思いは沢山の人の受け継がれていく。

もしかしたら、被爆者の話を聞けるのは僕たちの世代で最後かもしれない。僕はこの貴重な体験を、これからの僕の人生に活かしたいと強く思っている。

重ねて、僕の一つ下の7年生たちに旅の良さを伝え、来年参加したいと思ってもらえるように努力をしていきたいと思う。

平和の旅は戦争の意識が低い僕たちに、改めて戦争について考えさせてくれる機会になる。

これからの日本を戦争のない平和な国に導くには、このような旅が必要不可欠なのではないだろうか。

思いを伝える

中台中学校 8年 小田 結衣子

私が訪れた広島は、79年前に原爆が落とされたと思えないほど、平穏できれいな町並みでした。

初めて広島に足を踏み入れた私は、街の中を歩くだけでは、ここは79年前に原爆が落とされたとあまり感じられませんでした。一世紀も経っていないのに、あの日のことなんてなかったかのような様子に、少し悲しさを持ったのを未だに覚えています。

8月6日、私は平和記念式典に参加させていただきました。その中で、8時15分、黙とうがありました。原爆によってこの広島が地獄と化し、多くの人々が亡くなり、一瞬にして平和が奪われたと、初めて広島で実感した瞬間でした。79年前のこの瞬間、本当に原爆が落とされたのだと、あの日を生きていない私でも、言葉にできないほどの恐怖と悲しみに襲われたのを今でも覚えています。今も、あの瞬間を思い出すと、実際に被害を受けた方々、苦しい中あの時代を生きた方々は、どんなに苦しかったことか、想像を絶するほどだったのだと考えさせられます。これから先、あの瞬間を、私は忘れることはないでしょう。そして沢山の人に、原爆が落とされた、8月6日8時15分を何となく過ごすのではなく、平和記念式典に参加していなくても、あの日のことを思い浮かべて、戦争や平和について改めて考える瞬間にしてほしいと思います。

8月7日には、平和記念資料館を訪れました。私は、平和記念資料館を訪れる前から、これから見るものはとても悲惨なものだと覚悟していました。ですが、実際にこの目で見てみて、自分で思っていたよりも遥かに衝撃的で、残酷という言葉では表せないほどでした。原爆の被害で、ひどい傷を負った人や悲惨な死体の写真を見て、人間が負っていい傷ではないと思いました。今でも目をつむると、原爆によって負った傷ややけどを映した写真が目には浮かびます。あのようなひどい傷を負って、どれだけ苦しかったか、私にはどうすることもできなくて、とても悔しかったのを覚えています。原爆が落とされた後も生活を壊されて苦しむ人々の人生、大切な人を失った人々の思いが感じられ、とても精神を削られました。

『広島平和の旅』を通して私が伝えたいことがあります。一世紀も経っていないのに、今、私達がこんなにも争いなく幸せに過ごすことができるのは、79年前の原爆によって被害を受けた人々の、想像を絶するほどの苦労があったからだということ。そして、被害を受けた人々の苦しみは、無駄にしてはいけないということです。決して私達にとって、他人事ではありません。待っているだけでは、争いはなくなり、平穏も訪れないと思っています。私達は、彼らの苦しみや、あの日のことを積極的に知り、あの地獄を繰り返さず、彼らの思いを伝えていくために行動していかなくてはならないのです。

戦争のない未来へ

上板橋第一中学校 8 年 水町 俊介

私がこの平和の旅を通して学んだことは、「戦争と原爆の愚かさと悲惨さ、そして教育の大切さ」だ。

この旅に参加する前も戦争に対してそれなりに恐怖を感じていたが、この旅で見聞きしたものは、私の想像を遥かに上回るものだった。

私が話を伺った被爆者の山瀬潤子さんは今から 79 年前、当時 8 歳だった。山瀬さんは爆心地から 2.2km 離れた段原中町の家で被爆した。一発の原子爆弾により山瀬さんの父の腕はくの字に曲がり、山瀬さんに覆いかぶさった母は腕から血が大量に出た。広島はキノコ雲によって薄暗くなり、多くの被爆者であふれかえり、まさに「地獄」と化した。山瀬さんの話の描写はとてもリアルで、想像すると鳥肌が立った。

そして、平和祈念資料館で見た資料はどれも目を背けたいような恐怖を覚えるものばかりだった。特に、残留放射線により全身の皮膚がケロイド状になった人たちの写真は、原爆の残酷さを如実に表していた。

山瀬さんの話を伺ったり、平和記念資料館を見学して、改めて平和記念式典の資料を読み返してみた。

式典で小学生の二人が読み上げた「平和への誓い」の「今もなお、世界では戦争が続いています。79 年前と同じように、生きたくても生きることができなかった人たち、明日を共に過ごすはずだった人を失った人たちが、この世界のどこかにいるのです。本当にこのままでよいのでしょうか。」という言葉がとても胸に響いた。

この旅から帰って、私なりに「戦争はどうやったらなくなるのか」を考えてみた。

平和の大切さ、戦争の愚かさを伝えることはもちろん大切なのだが、それと同時に多くの人たちにしっかり「教育」していくことも大切だと思う。

その教育は平和や戦争のことだけでなく、「自己中心的な考えではなく、他者や他国、異なる考えや宗教を尊重し、それらが自分と違うからといって他を侵害する権利は誰も持っていない」ということを教え、考えさせることだ。「違い」を受け入れてリスペクトする。その上で平和や戦争について考える機会を増やせば、争いは減り、いずれ無くなるはずだ。

いつか世界から戦争が無くなり、未来の世界中の子供たちが「争いを繰り返していた昔の人の考え方は本当に残念だったね。」思うようになって欲しい。



広島平和の旅に参加して

上板橋第二中学校 8年 森垣 美由紀

中学生広島平和のたびに参加し、地域の事業や式典に参加してみて、一番心に残ったことがあります。それは、平和資料館の見学でした。

資料館に行くまでに、青少年平和の集いに参加して、被爆者から被爆体験を聞いたり、式典、灯籠流しなどに参加しましたが、本を読んだときと同じように想像はできるけどなかなか自分のことのように感じ取りづらいような気がしました。しかし、原爆者の被爆体験を聞いたあとに資料館の資料を見ると、原爆は実際に投下され、多くの人がなくなって、原爆が今も多く残っている。ということを感じることができました。原爆投下前と投下後の広島の変わり果てた街並み。黒焦げになったお弁当。原型がわからなくなっている金属のパーツ。原爆投下後の地獄を描いた絵。時が止まった時計。被爆してなくなった方の遺品と遺言。など、それらは、自分が今までイメージしたものよりもひどいもので、原爆の恐ろしさや、悲慘さを物語っていました。東京に帰ってきた夜、絵や、写真、遺品を思い出しては、心が痛くなるのと同時に怖いという感覚で、眠れませんでした。それくらい、原爆は恐ろしいものだということを学び直すことができました。

資料館に行き、実際に資料を見てみて、衝撃的だったのは何と言っても、地獄を描いたかのような絵と写真、当時の熱の威力を物語っているような資料でした。中でも、兄弟の写真は私にとってとてつもないほど心苦しいものでした。私には小学5年生の弟がいます。その写真の中の兄弟と、私たちを重ねてみるととても悲しく、涙が止まりませんでした。私以外にも、他の参加者や、お客さんも泣いていて、中には嘔吐している人もいました。それくらい衝撃的な絵や写真だったのです。被爆者は、思い出したくない思い出を私たち後世に繋いでいくために話してくださったと思うと感謝の気持ちとともに、しっかりと平和について伝え、原爆を過去のものとして捉えて行こう。と決意しました。

原爆や戦争の悲慘さ、平和の尊さ、大切さを改めて、この平和の旅で感じることができました。被爆者が被爆体験で、「戦争や原爆は、人々の生活を脅かしていたり、幸せな生活を奪っている。広島や長崎でおきた出来事を忘れ、悲慘な歴史を繰り返そうとしている。」、「戦争と平和について学び、それぞれの立場で自分にできることを小さくてもいいから始めていきましょう」と話してくれました。

あの日のような出来事を二度と繰り返さないよう、後世や、世界に発信していったり、積極的に本や、インターネットを使ってもっと深く、原爆についてや戦争について、平和について学んでいこうと思いました。

お互いの考えや、違うところを尊重しあって、戦争や核兵器のない本当に平和な世界にしていこう。という新しい目標がこの旅を通してできました。

この新しい目標を達成させるために、自分だけで行動して行くのではなく、友達や家族を誘って、共に学び、共に発信していきます。

—みんなが笑顔で幸せな世界を—

中学生広島平和の旅に参加して

上板橋第三中学校 8年 佐々木 葉

「自分にできる、どんなに小さなことでも、それが平和への一歩になる」中学生広島平和の旅に参加して、私はそう思った。

一日目、私達はヒロシマ青少年平和の集いに参加した。ヒロシマ青少年平和の集いでは、原爆被害の概要説明や被爆体験者の証言などを聞き、グループディスカッションをした。二日目には平和記念式典、宮島観光、班学習会、灯籠流しを行い、三日目には爆心地や平和記念資料館を見学した。三日間で私達は戦争や原爆被害の悲惨さを、見て、聞いて学ぶことができた。

その中でも私の心に残ったのは、広島青少年平和集いの最後に中・高校生ピースクラブの方が言っていた言葉だった。「微力だけど、無力じゃない」。その言葉が、とても腑に落ちた。

私達中学生にできることは、本当に小さなことで、国や団体などの大人には到底敵わない。だが、私達のできることは微力だとしても、無力ではない。

灯籠流しを見たときにも、そのことを更に深く実感した。二日目の夕食の後、私達は平和記念公園近くの元安川に向かい、灯籠流しを行った。川辺には大勢の人がいて、川にはたくさんの灯籠が流れていた。それを見て私は、この灯籠の一つ一つが、一人一人の平和への思いなのだと思った。灯籠一つでは、明るさが弱く周りを照らすのには足りない。平和への思いも、一人だけでは世界に大きな影響を与えることはできない。でも、たくさんの灯籠が集まれば川を照らすことができるように、大勢の人が協力することで大きな力になり、平和へと繋げることができるのではないか。そう言うと、一人では何もできないように感じるが、そうではない。一人一人が微力だとしても力を持っているからこそ、思いを一つにすることで大きな力になると、私は思った。

三日目の平和記念資料館でも、一人一人の力を実感した。平和記念資料館にはたくさんの資料や作品、日記などがあり、その一つ一つの展示物から被爆者一人一人の叫びが聞こえるようで、見ただけでとても苦しくなった。

原爆が投下されて今年で七十九年。被爆者の平均年齢が八十五歳になった今、私のように原爆の被害や戦争の悲惨さを知らない人が増えているのではないか。そんな中、原爆投下を繰り返さないためにもより多くの人に原爆の悲惨さを伝え、知ってもらふ必要があると思う。

今回の平和の旅で私は、実際に資料を見たり話を聞いたりして原爆の恐ろしさを学んだ。そして、平和の旅に参加した仲間や平和の集いで知り合った人達と交流し考えを伝え合うことで、より一層平和について考えることができた。

私達一人一人に世界を平和に変える力はないけれど、平和の旅に参加した一人一人がそれぞれの思いを周りの身近な人達に伝えていくことで、微力でも、力になれば良いと思う。

疑問

桜川中学校 8 年 水島 凜子

戦後 79 年、日本は平和である。しかしそれは、太平洋戦争においての、多くの人々の犠牲の下で築かれた平和だ。

今は亡き曾祖父の戦争経験談を祖母から聞いた。曾祖父は空軍にいた。戦争の話は家族にはほぼしなかったそうだ。しかし、唯一話したのは、頭頂部の髪の毛を伸ばし編んでいた人が多かったということ。戦死した時、神様にその髪を掴んで天国に導いて欲しいという思いからなのだそうです。戦争とは人と人との殺し合いだと思う。人を殺めたら天国には行けないだろうが、そうせざるを得なかった人がほとんどなのだ。自分の意思による行動は出来なかったのだ。辛い一言では言い表せない時代。私は、その方々の気持ちに少しでも思いを馳せ、この平和な時代を生きる意味を知りたい。

平和の旅に参加し、広島では昭和 20 年 8 月 6 日原爆が投下されたことにより、約 14 万人もの方々が亡くなり、爆心地から半径 2 キロ以内の木造建築は全て倒壊し、人々が失望のどん底に陥ったことをより詳細に知ることが出来た。また、原爆症に苦しみ、いつか自分も発症してしまうのではないかと恐怖で心も傷つき、人々は何重もの苦しみを味わったことを知った。私は、月次な言い方になってしまうが、このような悲惨なことは二度と起こってはならないと強く思った。

平和記念式典には世界各国から多くの方々が参加していたが、皆、どのような考えで参加しているのか知りたくなった。私たち日本人と同じ思いなのだろうか。参加国には、核保有国もいた。被爆地に降り立ち、非核化へと気持ちが動いたのだろうか。米国が原爆投下した理由は、戦争を早く終わらせるためだったとか、軍需工場や造船所などがあったから、などといくつか説があるようだが、人的損害、経済的損失をどこまで詳細に想定していたのだろうか。今となっては追求することは難しくなってしまったが、日本人として聞いてみたいと思った。

原子爆弾は B29 戦闘機によって運ばれ上空で核爆発を起こしたが、現代ではボタンひとつで核兵器を目的地に落とすことが出来る。この進歩は、どのように考えれば良いのだろうか。核抑止論という間違った思考を持つ国々がある不思議。原爆投下から 79 年、被爆体験を自身の言葉で伝え続け、非核化の重要性を訴えている方々の思いは実ることはないのだろうか。私は、今回の旅で戦争について多くの疑問を持ったが、その答えを生み出すことは出来なかった。それは、この平和の旅は一過性のものではなく、継続して平和とは何かを考え続ける旅の第一歩だからなのだ。

みなさん、平和について一緒に考えませんか？

「あの日」を忘れてはいけない

赤塚第一中学校 8年 伊藤 結莉菜

私は2024年8月5から7日の3日間で今を生きている私達がどれほど1945年8月6日の『あの日』について無知なのかを思い知らされました。

私達は8月5日の午後、広島に到着しました。その日私達は「ヒロシマ青少年平和の集い」に参加しました。そこでは、被爆体験者の山瀬潤子さんのお話を聞くことができました。山瀬さんは被爆当時8歳でその時に見た悲惨な光景の話や感じたことなどをお話してくれました。

山瀬さんは、「原爆が落ちた瞬間母が覆いかぶさってくれたため私は軽症で済みましたが、家の外に出ると薬屋の小母が腕から出血をしていたりお隣のT君が目にはガラスが刺さって出血しているのを見てまさに生き地獄だった。」と語ってくれました。私は小さい頃から叔父や叔母に原爆のことについて聞くことはありましたがそれが当たり前の日常をいとも簡単に壊してしまうものなのだという事は山瀬さんの話を聞くまで想像することができませんでした。そして、山瀬さんは今の世界情勢について「核兵器が少しずつ廃止されている中、近年核兵器がまた増え始めています。これは世界の問題であり、核兵器を廃止すること、そして若い世代の人々が戦争や平和について学び、考え、それぞれの立場でできることからすることが世界平和につながると私は思います。」と話してくれました。この言葉は山瀬さんが原爆を戦争を実際に経験したからこそ心から思うことだと思いました。そして、この言葉は話を聞いていた私達若い世代の心に印象深く残りました。

それから、広島平和の旅最終日、私達は広島平和記念資料館を訪れました。そこには当時の写真や、被爆者の遺品そして疎開先の家族から被爆者や兵士に向けて綴られた手紙が展示されていました。展示されていた遺品や写真はボロボロだったり傷だらけだったりと言葉を失うようなものばかりでした。これらは、私が想像していたものよりも遥かに酷く、苦しいものでどれほど自分が無知であったのかを思い知らされました。

私は5日から7日の3日間で見たこと聞いたことは、これから先絶対に忘れることはありません。そして少しずつ『あの日』の出来事が風化されはじめ、当時のことを体験した被爆者の方から直接お話を聞くことが難しくなっている今だからこそ、山瀬さんから聞いたように若い世代の私達が原爆について学び、考え、次の世代に伝えていかなければならないのだと思います。

平和への第一歩

赤塚第二中学校 8年 原 環希

今から 79 年前の 8 月 6 日、広島に一発の原子爆弾が投下されました。その瞬間、今の私達と変わらないような平和な暮らしをしていた広島の人々の人生は一瞬で奪われました。今の私達には想像もできない出来事がたった 1 つの原子爆弾によって起きたのです。

私が広島の平和の旅に参加しようと思ったのは、小学生のときに「はだしのゲン」を読み、本当にこんなことが起こったなんて、日常生活を送る中で全く想像できなかったからです。実際に原子爆弾が落ちた場所を訪問することで、自分の目を見て、その事実を感じ自分事として捉えたいと考えたからです。

広島平和の旅初日、被爆体験証言で山瀬さんのお話を聞きました。山瀬さんは爆心地から 2.2km 離れた自宅で被爆され、原爆が投下された瞬間のことやその後の話を詳しくして下さいました。山瀬さんのお話を聞いて今まで知らなかったことや原爆の威力、悲惨さを学ぶことができました。

2 日目の平和の式典には日本の参加者だけではなく、世界からおよそ 100 カ国の代表の方が参加されていることに驚きました。これは、過去におきた悲惨な戦争の体験を風化させてはならないという思いに多くの国々が共感していることを表しています。参加者たちがこの式典を通じて感じたことを周囲の人たちに伝え広げていくことにより、自国のことだけに専念することから他国との共存共栄を図っていくことにつながります。そして、世界から紛争がなくなること、世界中の人々が平和に生活を送っていけると考えます。

今回の広島平和の旅では、同級生の仲間と参加しましたが、平和について共に意見を出し合ったりする中で、普段、学校では平和について話をする機会がなかったけれど、みんなが平和について考えているのだということが再認識できました。私自身としては、平和であることがごく当たり前のことではないと気づき、また、平和な状態を維持するために努力していくことが必要だと考えを深めることができました。私達世代が将来大人になって、社会の中心となった際には、この旅に参加したみんなが経験を活かし、平和の大切さを訴えることができれば良いなと思います。

今回の広島平和の旅で平和とは何か学ぶ貴重な経験となりました。私が考える平和とは大切な人と毎日過ごすことができることだと思います。私達がごく当たり前に過ごしている日常が、本当は当たり前には存在するものではなく、みんなで維持していく必要がある貴重なものです。79 年前広島で起こったことを忘れずに、胸に刻み、今回学んだ貴重な体験を活かし、できるだけ多くの人に伝えていきたいです。家族や学校の友達、地域に住んでいる方々など、私達を含む次世代の人に平和について知って貰う必要があります。みんなが戦争の悲惨さや平和の尊さを知ることが平和への第一歩につながると私は思います。

平和への第一歩

赤塚第三中学校 8年 高瀬 莉空

戦争、紛争、その争いの先には人々の悲しみと、建物の破壊、命の強奪が生まれる。誰がそのようなことを望むのか。昭和 20 年 8 月 6 日 8 時 15 分、沢山の命が一瞬にして奪われた時人々は一体何を思い、感じ、考えたのか。私は、その事を考えながら広島へ出発した。

平和の旅の 3 日間は長いようで短い旅だった。その中で色々なことを体で感じ、心で感じた。1 日目のグループディスカッションは知らない人たちだらけで緊張していた。考えたことが上手く表現できなかった。だが、他のみんなは個人の意見を持ち、それを躊躇なく話していた。そこで「自分も話してみよう」と思うことができた。私の考え方に変化があったのを私自身実感した。意見交換の大切さを実感する機会となり、私も勉強になったと思うことができた。

その後、被爆者のお話を聞いて、平和の大切さを考えた。もし 1 分でもずれていたら、1m ずれていたらこの世にいないかもしれないと思うとゾッとした。私は直接声でお話を聞けて良かったと心の底から思った。そして世界の戦争がいち早く終結することを被爆者の方と心から願いたいと思った。

2 日目、平和記念式典に参加した。あの青空を人々は見えていたはずだった。普段通り生活していたはずだった。だがあの日その日常が奪われたのだ。一瞬して、。内閣総理大臣も含め多くの人が献花を行った。その後 8 時 15 分、一分間の沈黙が行われた。私も平和への思いをしっかりと伝えた。その時デモ隊の声が聞こえてきた。正直デモ隊には腹がたった。静かに眠らせてあげて欲しいと思った。このような場所ですることではないと思った。

3 日目、私が一番衝撃を受けたのが、原爆資料館だった。一つ一つ、見ていくとその時人々が何を考えていたかを無意識に考えてしまっていた。8 時 15 分に止まった時計、焦げてしまった弁当、焼けて破けた軍服、とてつもない量のものが目に入ってきた。原爆症のケロイドを見たときは、鳥肌が立ち私が受けていたらどうなってしまっていたのだろうと思った。遺書を見たときには泣きそうになり、「さよなら。母より」という文を見たときには特にそうだった。

私はこの 3 日間を通して、平和は言うだけではなく、誰か一人でも行動し続けることで掴み取れるものと思った。グループディスカッション、式典、被爆者講話、原爆資料館、全てが平和を考えさせるものであり、行動させるためだと僕は思った。人任せでは無く私が、僕がと行動することが平和への第一歩ではないだろうか。

埋もれ木に花が咲く

高島第一中学校 8 年 鬼澤 侑里

8/6 の午前 8 時 15 分、ドーンッという音と共に、広島の人々の笑顔は一瞬で原爆によって奪われてしまいました。

私は広島平和の旅に行くとき、最初は自分にも原爆の辛さがどういうものかあまりわかりませんでした。ですが平和のたびに参加して学んだことが 3 つあります。

1 つ目は被爆体験者のお話を伺ったことです。その被爆者は当時 8 歳で被爆したそうで、当時の様子や心境など伺いました。その講話の中で一番心に残っているのは被爆体験者が体験したものをそのまま描いた絵です。その絵の中には足をけがして手とおしりで歩いていたりと今の私達の世代じゃ考えもつかない光景があり、私が生まれる前にこんな事があったのか、、と 79 年前の真実を目の当たりにしました。

2 つ目は、平和記念資料館に行ったことです。最初、平和記念資料館に入った時声も出ないほど悲惨なものがありました。例えばボロボロで穴が空いた服や手持ち時計や遺書、死亡証明書などがたくさん並んでいました。それらを見ている時いろいろな感情がこみ上げてきました。紛争中の実際の写真のなかには死の斑点という題名の写真がありました。写真の中には肌に赤色の斑点を浮かび上げた男性が一人おり、この症状は原爆症の一つらしく、なぜ何も悪くない人が一つの爆弾で苦しまなくてはならないのだろうと怒りを覚えました。私一人の力では何もできないけれど周りの人たちからこの現状を伝えて少しでも原爆廃絶への道を切り開いていきたいと思いました。

3 つ目は平和記念式典に参列したことです。炎天下の中の開催でしたが、私の心の中に残ったものがあります。それは小学生の「平和の誓い」の言葉です。とても素晴らしかったのを今でも覚えています平和の誓いの中で「願うだけでは平和は訪れません」という言葉が胸に刺さりました。そうだ願うだけではだめなんだ。行動に移さないと平和は訪れないんだと再度、実感できた瞬間でした。

この題名の言葉は長い間不遇だった人に幸運が訪れることの例えです。私は原爆で被害を受けた人たちがまた原爆が落とされる前みたいに幸せになってほしいという願いを込めてこの題名にしました。わたしはこの広島平和の旅でいろいろな気づきがありました。この考えをできるだけ周りに伝えていきたいと思います。

広島平和の旅を終えて

高島第二中学校 8年 能智 心海

私は広島に着いたとき、広島はとても素敵なおとこだなと感じました。
79 年前にこの場所に原爆が落とされたとは、思えないほど、綺麗な場所でした。
私は広島平和の旅を通して、戦争の悲惨さ、平和の尊さを改めて感じることができました。

1 日目、私は、年齢も、住んでいる場所も違う人達とのディスカッションを通して戦争、核兵器、平和について様々な意見を交換しました。ディスカッションの内容は「あなたの地元では、どんな戦争を経験して、それをどう伝えたいか」「核兵器をなくすために自分たちは何ができますか」です。ディスカッションを終えて私は県によって戦争の被害状況が違い、学校で戦争について勉強する授業の回数も違う事がわかりました。広島 학교では約週一回戦争について勉強するそうです、私はあまり自分の学校では頻繁に戦争について勉強することがなかったのもっと増やしたら戦争の悲惨さがより沢山のの人に伝わるのではないかと思います。

2 日目は平和記念式典に参加したあと宮島(厳島神社)に行き、夜に灯籠流しを体験しました。

記念式典では日本人だけでなく、外国人の人々もたくさん来ていました。式典中小学生の子が話す平和の誓いがとても印象に残りました、自分より年下の子が多くの人の前に立ち、誓いをするのは正直驚きました。夜の灯籠流しはとても綺麗でした、私はこの先大切な人と過ごしていくこれからをなんの心配もしなくなる、そんな未来が来てほしいと思いながら灯籠を流しました。

3 日目の最終日は平和記念資料館に行きました。私は 3 日間の中で資料館が 1 番記憶に残りました。資料館には被爆時、被爆後の写真や絵、そして遺品などが展示してありました。私はたくさんのエリアがある中、特に魂の叫びエリアが 1 番心にきました、魂の叫びエリアでは原爆によって亡くなった人たちの心の底からの叫びが書かれていて涙が止まりませんでした。

私は戦争や原爆が何十年経っても人々を悲しませていることが許せません。今、戦争を経験して生きている人も一度見たあの光景は一生忘れることはなく、そのような人をもう二度と出してほしくないと平和の旅で改めて感じました。そして私は広島で見たことを友人や家族など、多くの人に知ってもらうことが少しでも核廃絶の一步になればいいなと思います。

忘れてはいけない日

高島第三中学校 8年 亀浜 朝琉

8/5、板橋区役所に集った22名の代表生徒たち。そこから皆と向かったのは被爆地広島県。

僕はこの夏、79年前に原爆が投下され、明日という楽しみを一瞬にして奪った“戦争”の惨劇を学ぶ、広島平和の旅に参加した。

平和の旅一日目、広島市到着後に向かった先は、広島市役所内で開催された「ヒロシマ青少年平和の集い」。会場では被爆者の方による被爆体験講話や、グループディスカッションなどの平和学習会に参加した。そこには僕たち同世代の人々が他地域からも大勢参加していた。僕は「あの日」の出来事を聞いた。それは自分の想像をはるかに超えた残酷な歴史だった。辺りは一瞬にして炎の海になり、道ばたに覆いかぶさる人の死骸。大切な人たちが一瞬にして引き裂かれた。多くの命をまたたく間に奪う破壊力。しかし、体験を語ってくださった方は、“自分だけ生き残ってしまった”という罪悪感に今もなおさいなまれていると。核兵器の恐ろしさは、この方のように、その後の人生にも耐えがたい苦悩が続いていると実感した。人間が人間らしく生きられない、人間が人間らしく死ぬことができない戦争の悲惨さを聞いて、心苦しそうに語ってくださった方に感謝するとともに、被爆国で生きていく僕は、次の世代にこの事実を伝えていかねばと心から思った。

平和の旅二日目、平和記念式典に参加。79年前の8月6日、8時15分。広島に原爆が投下され、その79年後に僕は現地で目を閉じ黙祷をした。そのとき僕は、戦争で命を落とした大勢の方たちがこちらを見てると背筋で感じた。僕みたいにまだ中学生の人も、それより若い人も「あの日」に亡くなったんだと思うと、その人達の方まで生きなければと思った。参加していた来賓の方達の言葉や、広島市民代表の方の言葉を聞き、平和の尊さを改めて考えなおすとともに、あの地獄のような出来事を繰り返さないために、と手を合わせ願った。式典後、宮島を訪れた。そこでは沢山の人が楽しそうに観光していた。僕は、あの日もし原爆が投下されていなかったら、今と変わらぬ光景が続いていたのだろうと、少し胸が苦しくなった。夕食を済ませた後、灯籠流しを体験した。元安川には被爆した人々が水を求め飛び込み、命を落とした。僕の灯籠には「平和」と「福」という文字をいれた。理由は、世界平和のため、被爆で亡くなった方が生まれ変わって幸福になりますように、との願いを込めた。川はゆるやかに流れていて、数千もの灯籠が流された。

平和の旅三日目、平和記念公園を巡った。公園内はきれいに整備されていた。僕達は、戦没者が眠る広島平和都市記念碑の前で黙祷した。僕は心の中で核廃絶のため、戦争で犠牲になったあなた達の死を絶対に無意味にしません、と心に誓い献花した。その後、平和記念資料館を訪れた。そこには、原爆が投下された当時のままの遺品や、被爆の惨状を写した写真や資料があった。あの日がどれほど痛ましい日だったのかが分かり、核の脅威がどれほど恐ろしいものか、心苦しい気持ちで見学した。

自分の目や耳で学べた今回の貴重な体験は、戦争の悲惨さ、平和の尊さを次の世代へ伝えていかなくはならない責任を感じた。僕ができる平和への一歩は、小さな一歩かもしれないが、まず自分の周りの人を大切にしていこうと思う。見て見ぬふりをせず、困っている人がいたら声を掛けてあげたいし、例えば友達同士で喧嘩をしてしまった時は、勇気を出して謝りたい。世界中の人が周りの人を大切にしていけば争い事なんて起きないと思う。そして、どんなに偉い人であろうと、人々を脅かす兵器の使用は、絶対に許されてはならないことだと思った。人間には心があるのだから、親切な心で対話する勇気を持ちたいと思った。

第2部

第12回 中学生長崎平和の旅



【参加生徒】

板橋第一中学校	落合 琉生	志村第四中学校	新妻 美桜	桜川中学校	青木 彩和
板橋第二中学校	木内 優里	志村第五中学校	岩本 彩吏里	赤塚第一中学校	橋本 千穂
板橋第三中学校	森田 千春	西台中学校	新谷 律	赤塚第二中学校	下見 瑠花
板橋第五中学校	倉持 葵	中台中学校	小島 さら	赤塚第三中学校	吉田 レナ
加賀中学校	後藤 心桜	上板橋第一中学校	久野 智輝	高島第一中学校	富樫 柊
志村第一中学校	小林 瑛茉	上板橋第二中学校	松本 菜奈	高島第二中学校	小野 こゆき
志村第二中学校	町田 楓	上板橋第三中学校	菊池 倫加	高島第三中学校	吉居 克峻
志村第三中学校	清水 結心				

【引率者】

中台中学校 宮澤 一則校長（団長） 赤津 志子教諭（指導員） 荒牧 大幹教諭（指導員）

中学生長崎平和の旅 行程表	
実施期間 令和6年8月8日～10日（2泊3日）	
8月8日（木）	
時 間	行動内容
7:00	板橋区役所集合・出発式
7:25	板橋区所 発（都営地下鉄）
8:30	羽田空港 着
9:50	羽田空港 発 ※
10:30	東京駅 着
12:00	東京駅 発
16:00	博多駅 着
16:30	博多駅 発（観光バスで長崎市内ホテルへ）
19:30	ホテル 着
20:00	夕食
22:00	就寝
※前日に発生した落雷の影響で、搭乗予定の飛行機が欠航になったため、新幹線での移動に行程を変更した。	
8月9日（金）	
時 間	行動内容
6:00	起床
6:45	朝食
7:45	ホテル 発（観光バス）
8:50	平和公園 着
10:35～11:48	平和祈念式典参列
12:15	昼食
13:30～16:15	市内見学（観光バス）
17:00	ホテル 着
18:00	夕食
19:15	班学習会
22:00	就寝
8月10日（土）	
時 間	行動内容
6:00	起床
7:00	朝食
8:10	ホテル 発（観光バス）
9:00	原爆落下中心地 着（献花）
9:30～11:00	長崎原爆資料館・追悼平和祈念館見学
11:10	原爆資料館発
12:00	昼食
13:00	長崎空港 着
13:45	長崎空港 発
15:20	羽田空港 着
15:55	羽田空港 発（都営地下鉄）
17:30	板橋区役所 着・解散式

平和な地球を守るために

第12回中学生長崎平和の旅

団 長 宮 澤 一 則

(中台中学校長)

板橋区は昭和60年に「平和都市宣言」を行い、平成7年から「中学生広島平和の旅」を開始し、平成23年から「中学生長崎平和の旅」を実施するようになりました。また、区役所の1階には広島市の「平和の灯」と長崎市の「誓いの火」から採火した「平和の灯」が燃え続けています。これらはいずれも、平和の尊さ、戦争の悲惨さを後世に伝えるものであり、風化させない重要な役割を担っています。現在の日本は「平和な社会」という印象を受けますが、平和は当たり前のように訪れるものではなく、先人たちの努力の上に成り立っています。我々も、このことを自覚し、平和の尊さや戦争の悲惨さを後世に引き継いでいく責務があります。

「第12回中学生長崎平和の旅」には、各中学校の代表22名が責任と誇りをもって参加してくれました。1日目は、出発前日の雷の影響で長崎行きの飛行機が欠航となり、急遽、新幹線で東京から博多まで行くことになりました。博多からバスに乗り換えて長崎に行く途中で、宮崎で震度6弱の地震が発生しましたが、なんとか長崎まで12時間かけてたどり着くことができました。このため、1日目に予定されていた「青少年ピースフォーラム」には残念ながら参加できませんでした。2日目からは予定どおりの行程を進めることができ、第79回長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参加しました。式典の中には、長崎平和宣言や被爆者代表の方からの話がありましたが、長崎市長が「平和をつくる人々よ！一人ひとりには微力であっても、無力ではありません。」と熱いメッセージを送っていたことが印象的でした。午後は出島や浦上天主堂、そしてグラバー邸などを見学し、長崎の歴史に触れることができました。3日目は、長崎原爆資料館を見学し、熱で溶けた鉄塔や跡形もなくなった長崎市の写真など、原爆の恐ろしさを目の当たりにしました。

3日間の短い体験でしたが、中学8年生にとっては、とても大きな刺激になったと思います。この時に全身で感じたことを周の人たちに伝え、広めてほしいと願っています。一人ひとりに宿った「平和の灯」は小さいかも知れませんが、22人の代表が、それぞれの中学校で伝えれば、9000人の中学生に広がります。そして、「平和のつどい」での発表や地域への発信により、57万人の区民に広げることができます。「中学生長崎平和の旅」は終わりましたが、平和への取り組みはこれから始まります。

「中学生平和の旅」に参加した生徒を中心に、平和の尊さや戦争の悲惨さを後世に伝え、平和を守る努力を続けてほしいと祈っています。そして、板橋から日本、そして世界へと「平和の輪」を広げる人材になってほしいと願っています。

平和学習を通じて

板橋第一中学校 8年 落合 琉生

79 年前のあの日、たった一発の爆弾で多くの人の命と、たくさんの建物が一瞬にして失くなりました。それが「原爆」です。今回、原爆の悲惨さを実際に長崎に訪れることによって、貴重な経験や学びを深めた有意義な 3 日間となりました。

事前学習では長崎に落とされた原爆「ファットマン」について学びました。いままで原爆のことは事前の資料や HP 等からしか知らなかったもので、徐々に調べていくうちに、二度と原爆が投下されてはいけないことを強く感じました。

平和の旅1日目では、雷の影響により、飛行機が欠航になり新幹線やバスを使って長崎まで行く事になりとても大変でした。長崎についたときには午後7時になっていて、午前7時に板橋区役所で出発式を行ってから、約12時間の移動となりました。これにより1日目に行う予定だった青少年ピースフォーラムは参加できませんでした。2日目の長崎平和祈念式典で特に印象に残っているのが「長崎を最後の被爆地に」という言葉がとても印象に残りました。僕はこの言葉を聞いて、長崎の原爆の惨禍を知ること、現在進行中のロシアによるウクライナ侵攻など戦争が起きている中、核兵器を絶対に使ってはいけないということをたくさんの人々に知ってもらう必要があると思いました。また、被爆者代表の三瀬清一郎さんは「8月9日に太陽が落ちてきた」と表現しました。これを聞いて、当時は僕の想像を絶するような壮絶な体験をされたのだと思うと、本当に原爆は恐ろしいものなのだと改めて感じました。3日目は、長崎原爆資料館に行きました。原爆資料館には、原爆の被害を受けた当時の風景を再現した空間がとても印象的でした。爆風によって建物の地盤がずれていたり、コンクリートでできたものがことごとく破壊されていたり、原爆の威力がどれほど強かったか、身を持って感じることができました。また、原爆によって亡くなった人々の名前や顔を登録できる施設など原爆に関する展示や施設がたくさんあり、原爆によってどれだけの被害を受けたのかをたくさん学ぶことができました。その一方で、現在、世界のどの国がどのくらい核兵器を保有しているのか展示室で一目で知ることができ、今もなお、核兵器を保有している国々があることにとてもショックを受けました。

「一見は百聞にしかず」とあるように、この3日間の平和の旅を通して、事前学習では知り得なかった原爆の恐ろしさ、そして、核兵器を世界から無くすことの大切さを知ることができ、この旅を通じて、これから多くの人々に平和の大切さを伝えていきたいです。

伝えていく

板橋第二中学校 8年 木内 優里

「微力だけど無力じゃない」これは、平和記念式典で長崎市長である鈴木史郎氏が発信した言葉です。

1945年8月9日11時2分、アメリカ合衆国によって長崎に原爆が投下されました。この攻撃により、長崎の市街や人々の生活は何が起こったのかわからないうちに奪われました。そして数え切れないほどの命が一瞬にして奪われました。攻撃は一瞬でしたが、原爆症の痛みや家族、友達、知合いを失った悲しみは原爆投下から78年たった今でも続いています。被爆者の平均年齢が85歳を超え、原爆の恐ろしさを身を持って体験している人が少なくなっている今、1945年8月9日のあの日のようなことを二度と繰り返さないために私たち自身ができることは何でしょうか。いちばん大切なのは「原爆の恐ろしさを身をもって体験している人が少ない今だからこそ、私たち一人ひとりが原爆の恐ろしさを何世代にも伝える」ことだと強く感じました。私たちが「原爆の恐ろしさ」や「戦争は決して起こしてはいけないもの」だと理解できるのは、原爆や戦争に関する知識を持っているからです。そして、実際に原爆の被害にあったわけではない私たちがその知識を持っているのは、実際に原爆の被害にあった方々、いわゆる「被爆2世」の方々が語り部となって当時の状況や気持ちを伝えていただいているからです。

しかし、被爆者や原爆の被害にあった方々が年々亡くなり、語り部が少なくなっていく中、もしこの先実際に体験談を伺う機会がなくなってしまうたら。未来の子どもたちは戦争や原爆の知識がなくなり、戦争、原爆への興味関心すら持たなくなってしまうかもしれません。そのような人たちが増えていったらいずれ、「長崎を最後の被爆地に」は実現できなくなってしまうです。

この先の未来を今よりも平和な世の中にするためには、私たち一人ひとりが語り部となり、「原爆の恐ろしさを何世代にも伝える」ことが大切です。家族、友達、知合い一人でも多くの人に原爆について知ってもらう。そしてそのことをさらに色んな人に伝えていくことで、何世代、何十世代にも戦争、原爆について考える人が増えます。平和な世の中の実現のためにはどんな状況、どんな時代においても平和の尊さを忘れないことが大切なのではないでしょうか。そして自ら情報を発信するためには、原爆について理解することが必要不可欠です。実際に現地を訪れたり、本を読んだりして知識を得ることで初めて、伝えることができます。原爆や戦争は一言で言えるほど単純なものではありません。一度調べただけですべてを理解するのは難しいかもしれません。しかし「調べて原爆や戦争について少しでも知る、理解を深める」ことに意味があります。「少しでも原爆や戦争についてわかったことがある」と言えることが大事なのだと思います。

「微力だけど無力じゃない」この言葉の通り、家族、友達、身の回りの人に戦争や原爆について私達一人ひとりが語り部となって伝えていくことは微力かもしれませんが、しかし、無力ではありません。私達一人ひとりが語り部となって伝えていくことが大切なのです。

あの日を忘れないように

板橋第三中学校 8年 森田 千春

1945年の8月9日11時2分に長崎に一発の原子爆弾が投下されました。長崎の町は一瞬にして火の海となり、多くの人の命を奪いました。その日から今年で79年が経ちました。現在、私達は戦争を経験した人の人数が年々減少していることもあり、戦争について無関心になり始めているかもしれません。私達は、「平和」で暮らせているというのがどれだけ大切なのかもっと考える必要があると思います。

1日目の青少年ピースフォーラムは残念ながら参加することはできませんでしたが、2日目の平和祈念式典には参加することができました。私はそこで、鈴木市長の「世界中の誰にも、二度と同じ経験をさせない」、「核兵器は使ってはならない」という言葉が印象に残りました。この言葉は世界中に発信していると思いますが、今を生きる私達にも言っているのではないかと思います。また、被爆者の三瀬清一郎さんの話を聞いて、原爆が落とされたときの衝撃は、自分たちが思うより凄まじい威力だったということが分かりました。3日目に「長崎原爆資料館」を訪れて、私は長崎が原爆を落とす第二候補地で、第一候補地の天候があまり良くなく、長崎に落とされたということを知ることができました。また、原爆資料館には原爆の熱によって焼けたお弁当や服があり、被爆地の近くにいた人々の遺体の写真や原爆症について詳しく書かれたものなどがありました。私はそれらを見て、原爆が落とされた近くにいた人は凄まじい熱によって亡くなっていったということを改めて自分の目で確認することができました。原爆による症状は急性障害と後障害の2つにわかれていて、急性障害は原爆直後に表れる症状のことをいい、後障害は原爆が落とされた数ヶ月後に表れる症状であり、後障害は原爆による「熱風」、「放射線」、「爆風」によって起こるということが分かりました。

私は長崎平和の旅で戦争の恐ろしさや悲惨さ、過酷さを知ることができました。「戦争は決してあってはならない」ということや「平和の尊さ」を改めて痛感しました。私達が今平和に暮らせているのは、過去の戦争の経験があつてからこそであり、過去がなければ今のように暮らせているか分からないため、私達は絶対にあの日あったことを忘れてはならないと思います。

私は今回経験したことを踏まえて原子爆弾の恐ろしさを伝えていきたいと思います。



今から、未来のために

板橋第五中学校 8年 倉持 葵

1945 年 8 月 9 日午前 11 時 2 分長崎、松山町上空で原子爆弾が投下されました。原爆は強烈な熱線と凄まじい爆風が起こり、家屋が破壊され、爆発時に放出された放射線により生き残った人々にも深刻な影響を与えるなど、膨大な被害を受けた長崎。私はこの 3 日間、原爆について向き合い、命の儚さやその命の大切さを学ぶことができました。

1 日目は前日の雷の影響により、飛行機が飛ばず、一日かけた移動となりました。そのため、残念ながら予定されていた被爆体験講話会や被爆建造物のフィールドワークに参加することはできませんでした。

2 日目は平和祈念式典に参列しました。11 時 2 分～11 時 3 分の 1 分の間の黙祷の時間では、この時、一瞬にして当たり前だった日常が奪われてしまったことを深く感じることができ、人々の苦しみや悲しみ、辛さを考えていたら私自身も辛い気持ちになり、その 1 分間はとても長く思えました。その後、長崎市長から長崎平和宣言が行われました。その内容の中の「一人ひとりでは微力であっても、無力ではありません。私たち地球市民が声を上げ、力を合わせれば、今の難局を乗り越えることができる。国境や宗教、人種、性別、世代などの違いを超えて知恵を出し合い、つながり合えば、私たちは思い描く未来を実現することができる。」私はこの言葉を聞いたとき「塵も積もれば山となる」という慣用句を思い出しました。この意味としては些細な行動も、時間をかけて継続することで、やがて、大きな結果につながるという意味があり、「人々が一人ひとり力を合わせればいつか平和をつくることができる。」という意味につながると感じることができました。

3 日目の長崎原爆資料館では、原爆が破裂した時刻のまま止まった時計や原爆により亡くなった方々が着ていた服、壊れた建物の残骸が展示されていました。その中には黒焦げとなり、被爆した少年や母子などあたり一面に転がっている死体の写真もあり、その写真から調べただけではわからなかった原爆の威力やその無惨さ悲惨さが胸に痛いほど感じることができました。

この3日間で私は、命はときには一瞬にして奪われてしまう儚いもので、とても大切なものであり、平和の尊さを改めて実感することができました。そして平和宣言で言われていたように一人ひとり力を合わせ、平和尊さや被爆者の思いについて伝えていくことが、今から未来のために私達ができることだと私は考えます。

平和の尊さ

加賀中学校 8年 後藤 心桜

1945年8月9日午前11時2分、長崎に住む人々の平和を奪った。爆心地付近の建物は跡形もなくなり塵と化し、ついさっきまで遊んで、笑顔で過ごしていた人々も一瞬にしてたくさんの尊い命が奪われた。

一日目、私たちは前日の雷雨の影響で飛行機が欠航してしまい新幹線で5時間、バスで2時間、計7時間の移動をし長崎に向かいました。そのため予定していた被爆体験講話等には参加することができませんでした。

ですが二日目の平和祈念式典では10歳のときに被爆された三瀬清一郎さんが当時の状況や感情を語っていました。三瀬さんは原爆が落とされてから数日後、当時通っていた伊良林国民学校のことが気になり友人とともに様子を見に行ったと言いました。そこで見たのは男女の区別もつかないほど血だらけの人、上半身裸で傷を負った人たちが「水をください、水を飲ませてください」と弱り切った声で水を求める人々だったといいます。もし私が10歳のときにそんな悲惨な光景を見たとしてどんな気持ちになるのでしょうか。まだ物心がついたばかりの時、見たこともないような状態の人々を見て、息絶えた人々を見て何を思い、何を感じるのか、考えただけで耐えきれないほどの絶望感を感じました。考えただけでこんなに苦しいのに実際にその場にいた三瀬さんは一体どれほど大きな感情を抱えたのだろうか、そう思いながら式典に参加しました。

三日目は長崎原爆資料館へ行きました。資料館に入ってすぐにあったのは11時2分で止まった時計。その時計は原爆が落とされたという事実を語るように立っていました。資料館にはボロボロになった服、皮膚が垂れ落ちた人の顔の、地に倒れる遺体の写真、どうにか自分の子に母乳を与えようとする母親の写真など、どれも平和の光は、到底感じられない残酷な写真たちでした。

この旅に参加した22人達と共に平和について考えることができた3日間でした。平和式典に参加して被爆者の話を聞いてその状況を想像し、原爆資料館では実際の展示品、写真を見て、平和式典で想像した原爆投下当時の状況がより鮮明にイメージできるようになりました。

今から私にできることはこの3日間で感じ、考え、思ったことをより多くの人々に伝え、平和の尊さを考えてもらうことだと思います。平和祈念式典で平和祈念像の後ろに浮かぶ飛行機雲がこの長崎に誰かが来たことを伝えているようにも見えました。誰かが今自由に日本を旅しているという事実だけでも少しだけ、平和に近づいているようにも見えました。

今私達ができること

志村第一中学校 8年 小林 瑛茉

「世界中の誰にも、二度と同じ体験をさせない」長崎平和宣言で鈴木史朗市長が言っていた言葉です。私はその言葉を聞いて深く考えさせられました。街はとても明るい雰囲気でもとても仲良くしていたのに、79年前の8月9日、原爆という人々の人生を破壊する恐ろしいものが投下されました。目に見えるものが真っ赤に染まり、黒い雨が降り自分が見ていた光景からは想像することができませんでした。

私は長崎原爆資料館を訪問し、自分がまだ未知だった79年前の事実を学びました。それは見るのが厳しいほど残酷なものでした。水を欲しがりながら息絶えてく人々、原爆の熱線で肌が垂れ下がってしまっている人、亡くなってしまった友人を目の前で焼いている人、すべてが辛かったです。また被害はその当時だけでなく、今も原爆症で苦しんでいる人も沢山います。原爆で命を落としてしまった数は現時点で約20万人にもなります。私は人の当たり前であったことや夢、希望が原爆一つで破壊されてしまったことはこれからの人生の上で決して忘れていけないことだと考えました。

自分自身がこの長崎平和の旅を通して感じたことは、今、自分が生きているというのは当たり前ではないということです。実際私も生きている中で辛い、嫌だと思ふことも少しありますが、当時の人々は常に生きなければならないとずっと思いながら日々を過ごしていました。また、人の命を奪うような原子爆弾や核兵器などを世界中からゼロにしたいと心から思いました。

そして私が決してこのような出来事がまた起こらないようにするには、79年前の事実を沢山の人に伝え、忘れないことが重要だと思います。しかし、現状は被爆者の高齢化で伝えていくことが難しくなっています。その時に私達が自ら原爆や戦争の残酷さ、平和の尊さを学び多くの人に伝え繋いでいくことが大切ではないでしょうか。まだ、この事実を知らない人、少しでも関心を持っている人々に伝承し理解してもらいたいと思います。この世界を平和にするために私自身が心を打たれた鈴木市長が残した言葉を胸に、強い意志を持って平和について私ができることは何か考え伝えていきたいです。

長崎を訪れて

志村第二中学校 8年 町田 楓

飛行機から新幹線への変更により2日目からのスタートとなった平和の旅。長崎平和祈念式典に向かっているときバスガイドさんが長崎の町並みについて解説してくれた。長崎の風景はとても美しかった。しかし、バスの中から時折見える原爆の爪痕は私の目によく焼き付いている。特に、爆風で半分なくなった鳥居は一本の足で立っていて原爆の威力の強さと原爆を生き抜いた力強さを感じた。

平和祈念式典が始まり時刻は11時2分を指した。ブザーのような音が聞こえてきた。鐘がなっている。その瞬間皆静かになり私も黙祷を捧げ平和を願う。79年前のこの瞬間、確かにここに原爆が投下された。私は胸に深い哀しみを感じた。それと同時に、被爆者の方の数々の苦しみや犠牲、そして失われた無数の尊い命が思い浮かんだ。また、平和への誓いにて被爆者代表の三瀬清一郎さんの話を聞いた。三瀬さんはオルガンで遊んでおり祖母に叱られ、手を止めたとき原爆が炸裂した。爆風が家を吹き抜け、周りは惨憺たる有り様だったそうだ。三瀬さんの話す原爆体験はまさに地獄そのものだった。幸い家族全員無傷だったそうだが、この話を聞いて原爆が何気ない日常を一瞬で壊してしまうことに恐怖を感じた。しかし、今まで思っていなかった「原爆について知らなくては」という思いが芽生えた。

3日目は長崎原爆資料館を訪れた。各班にガイドさんがついて資料館を周ることになった。そこはまさにタイムスリップしたようだった。11時2分で止まったままの柱時計、被爆した衣服や瓦など、それを説明してくださったガイドさんの声はとても重く感じた。その中でも私が衝撃を受けたのは被爆し真っ黒焦げになった少年の死体だ。私は最初それを人だと思わなかった。むしろ思いたくなかったのかもしれない。生きたまま焼かれるなんて想像もできない痛みだろう。原爆の恐ろしさをひどく痛感した。原爆について無知は罪だと思った。原爆について知るのは、少し怖いと思う人がいるかも知れない。しかし、被爆者の痛みを一人間として自分の良心で受け止める、過去に目を背けずに知るということは二度と同じ過ちを繰り返さないようにできる平和への大きな一歩だと思う。

世界には10000発以上の核兵器があり、今すぐ使えるのは4000発もある。中東情勢が激化し、ウクライナ侵攻に終りが見えず核兵器の使用が示唆されている今、実際に長崎を訪れてみてはどうだろうか。教科書やテレビでは感じられないことが被爆地にはあると思う。様々な人が被爆地に訪れることで生まれる力を私は信じている。

長崎を最後に

志村第三中学校 8年 清水 結心

1975年8月9日に長崎に原子爆弾が投下されてから79年。長崎は「最後の被爆地に」を強く訴え続けている。だが、3日目にいった長崎原爆資料館で、核爆弾の実験はより進んでいるということを知り、戦争が起こってしまったら、79年前と同じ悲劇、それ以上の被害が起こり得る可能性があるということ学べた3日間だった。

初日、板橋区役所から出発し、空港へ着いたが、飛行機が欠航で新幹線に変更となった。新幹線に5時間乗り博多駅へ。そこからバスで2時間かけて宿へ向かった。板橋区役所から宿まで12時間かけて行ったため、青少年ピースフォーラムに参加することができなかった。本来なら被爆した方の話を聞き、平和とは何かなどの話題についてグループディスカッションをする予定だった。

2日目の平和祈念式典では被爆者代表の三瀬清一郎さんの話を聞いた。原爆は日常を変えてしまう。友達がいなくなってしまうたり、その後の原爆症に悩まされながら生きなければならないということを想像し、私達が今このような環境で生きられていることは当たり前ではないということを考えさせられる良い機会だった。長崎市議会議長の毎熊政直さんが式辞で「平和の願う活動は、世界から戦争や核兵器がなくなるまで、その歩みを止めることなく、次の担う若い世代によって、毎年高校生平和大使が輩出され、国内外において積極的な活動が繰り広げられている」とおっしゃっていた。唯一の被爆地日本から高校生平和大使が輩出され、国内外で活動をしているとは知らなく、この活動が、戦争、核兵器をなくすための活動につながる大きな一歩になるのではないかと思う。長崎市長の鈴木史朗さんが長崎平和宣言をした。読み上げる内容の中に、「平均年齢が85歳を超えた被爆者への援護のさらなる充実と、未だ被爆者として認められていない被爆体験者の一刻も早い救済を強く要請します」とあり、被体験者の方々は救済を受けられていないという事実を知り、鈴木史朗さんがこの場で政府に強く要請しているため、このようなことを実現させていくために岸田内閣総理大臣を始め、日本政府は動いていかなければならないのではないかと私も感じた。

3日目の長崎原爆資料館では、実際に見て、触って感じた原爆の威力の強さ、原爆の熱線、熱風、放射線の強さ、それらを受けた人々の体の変化、投下された原爆「ファットマン」の仕組みなどが展示されていた。そして、核実験が進んでいることが分かる表が展示されており、原爆が投下されてから79年経ち、技術が進歩しているため、核爆弾はより精度が高く、威力の強いものが生まれているのだと思った。

この旅を通し、私は、世界が平和になるには、核兵器を作らせない、実験させないことが大切だと考えた。だが、自国を守るため、戦争を早く終わらせるために実験を続けていたり、核兵器を作り続けてしまうのだと考えると、唯一の被爆地日本から積極的に核兵器の危険性、恐ろしさなどを伝えていかなければ平和というのは実現しないのではないかと思った。

平和について考えて祈ること、私にできること

志村第四中学校 8年 新妻 美桜

今回の長崎平和の旅で私が学んだことは命の大切さとこれからの平和についてです。

8月9日、長崎に原爆が投下された日から79年後、長崎では平和祈念式典があり、多くの方が来ていました。家族で来ていたり、私たちのように平和の旅で来た人たちもいた中で、私が驚いたのは、海外の方がたくさん来ていたということでした。長崎、広島への原爆投下、戦争のことが海外の人にも伝わっているんだなと感じました。

被爆者代表の方のお話を聞いて、色々考えました。投下されるまではいつものように生活を送り、突然原爆が落とされるなんて思いもしなかったのではないのでしょうか。今ある私の生活は、戦争で辛い思いをした方たちのおかげで、毎日温かいご飯を食べたり友達と学校で笑い合ったり、布団でゆっくり眠ることができるのは本当に感謝しなければいけないことなんだなと思いました。

長崎原爆資料館では、2024年から1945年の79年前に遡り、見学することができました。

爆資料館の建物はものすごく綺麗でした。ですが、展示されているのは想像以上にとても恐ろしいものばかりでした。当時の衣服や遺品、今と少し違うものがあったり今と変わらない形をしたものもありました。

原爆や放射線物質がどれほどの被害をもたらしたのか。資料や事前学習で目にしていたけれど、正直それを上回っていたのではないかと思いました。自然を壊したり、人の命、人々の記憶まで壊したりしました。たくさんの方が亡くなっていたりはわかっていたつもりでしたが、今もまだ後遺症で苦しんでいる人がいることは、戦争について勉強するまで知らなかったことです。私はまだ生まれていないしその場にいなかったことで、どれほど痛くて辛かったのかはわかりません。けれど原爆資料館で展示されているのを見て、理解することができました。きっと、私以外の見学していた仲間、周りの人も同じように考えていると感じます。

原爆資料館の見学は怖いと感じましたが、楽しく学ぶことができました。このような体験は生まれて初めてだし、これまで以上に自分の生活を見直し大人になった実感がしています。

平和な生活とは、楽しいとか嬉しいという気持ち以上に、辛いとか苦しいという気持ちばかりになってしまいます。平和の旅は、事後発表会が終わって終わりではありません。これからが重要です。日本が、世界が、これからも平和であるため平和の旅に参加した私たちが伝える側となって、たくさんの人に伝えていきたいです。正直、知れば知るほど目を背けたいし耳も塞ぎたくなる内容もありますが、私は今回の平和の旅での経験と思います。学習を思い出し、しっかり考えて戦争のない平和な世界を願い、伝えていきたいと思います。

長崎は今でも訴え続ける

志村第五中学校 8年 岩本 彩吏里

1945年8月9日午前11時2分。長崎に重さ4.5tの原子爆弾が投下されたことにより、数えきれないほどの尊い命、建物、街の風景が失われ、あたり一面が焼け野原となりました。この原子爆弾による死者73,884人、負傷者74,909人、合計約15万人の人々が被害に巻き込まれ、また爆心地からおおよそ500m先の西方面にある長崎市立城山国民学校では、建物内へ入ることができず、在籍約1500人中約1400人が家庭などで子供達が亡くなったと推定されました。被爆直後だけではなく、被害を受けてからも長年の被害が相次ぎ、草や木などの植物はこの先70年生えてこないと言われ、食糧を手に入れることさえ難しい現状で、絶望的な被爆地であったと言われている。

原子爆弾が投下されてから早80年が経とうとし、実際に被爆を受けた人々に被爆手帳を所持することを認められないなどと今も尚、全身に火傷を負ったまま原爆症に苦しんでいる方もたくさんいます。平和式典での被爆者代表の三瀬さんは、自分自身を含めた多くの被爆者は毎日健康不安に怯え、核兵器廃絶を訴えてきたと述べていました。ですが、世界に目を向けてみると、ウクライナ、パレスチナなどは紛争が泥沼化し、多くの子供達が核兵器などで命を落としています。今現在のロシアによるウクライナ侵攻では、3500ほどの学校、スーパーマーケットや建物自体が核兵器によって破壊され、難民や避難する人々も急増してきました。これらのことにより、この現状を実際に経験したことがある国、私達日本人が世界に向けて核兵器の恐ろしさについて発信すべきではないかと考えさせられました。

被爆者の方々たちの平均年齢は85歳を上回り、年々減少しているため直接被爆者が経験した実話をそのまま伝えることは難しくなっていますが、長崎を最後の被爆地にするために、日本以外の被爆国を増やさないために、一人一人が平和への強い思いを抱き、語り継ぐことができればよいと思います。二度と戦争が生まれないためにも、他社の意見尊重、信頼を育み、対決ではなく対話することでの核兵器の廃絶や、平和な解決への道のりが開かれると考えます。

これからの自分。

西台中学校 8年 新谷 律

私は長崎平和のたびに参加して、原子爆弾の悲惨さや恐ろしさについて学びました。私はその学びを自分ごととして考えることができたのかどうか帰ってきた今でも考えています。

帰ってきた日から、自分自身に問いかけています。「来年の8月9日の11時2分、自分は平和について考え、黙祷をしているのかな？一緒に長崎平和の旅に参加した22人も同じ気持ちでいるのだろうか？」と。長崎に実際に参加して学んだことはたくさんあったにも関わらず、私は来年の8月9日に黙祷をしている自分が想像できませんでした。実際に長崎平和の旅に参加した私がそうであれば、長崎平和の旅に参加していない友人は、平和について関心が低いかも知れません。

では、私は友人に何を伝えられるのでしょうか？

放射線の影響、原爆の威力、被爆者と認定された方とそうでない方で補償問題が今でも続いていること、長崎原爆のほうが広島原爆より威力が大きかったこと、投下目標が当初は長崎ではなかったこと、被害の効果を知るために投下前と投下後に写真撮影がされたこと、長崎原爆の原料であるプルトニウムのこと・・・など私はたくさん学びました。

この学んだことを自分なりに精一杯伝えていきます。

人に伝えることを行動に移すことは大変むずかしいと思います。ただ、長崎平和のたびに参加した一人として学んだこと、感じたことを忘れずにいたいです。そして、人に自分の思いや考えていることを伝えられる人間になりたいです。その私の思いに共感してくれる友人を増やしていきたいと思います。

私は決めました。

私一人の力はわずかですが、自分の行動は自分で決めることができます。私一人でも長崎平和の旅での思いを忘れず、黙祷は続けていきます。時間はかかるかも知れませんが、自分ごととして平和について捉えるために興味を持ち続けこれからも平和について考えていきたいと思っています。

戦争を終わらせた原爆

中台中学校 8年 小島 さら

私は三日間の旅を通じて長崎県の歴史を巡り、平和について学んだことを沢山の人の伝えるという使命を担って板橋区役所を出発しました。

長崎で特に記憶に残っているのは原爆資料館です。様々な形で当時の様子を残した物が残る中、実際に触れることの出来たビンはまだに放射線が残っているような気がしました。少し歪な形をし、薄く汚れたビンでした。今まで教科書で学び想像していたものより、はるかに重い当時の空気を肌で感じました。原爆によって、目には見えない放射線が多くの人に認知されることとなりました。上空から投下した原爆は、多くの被爆者に一生向き合う事となる後遺症をもたらしました。後遺症により、今も苦しむ被爆者の方は現在七十九歳以上です。平和の尊さを訴える原爆の被爆者がどんどん減っていく一方で世界では今も争いが絶えず不安に怯える人がいます。原爆の恐ろしさから、今や何倍の威力があるか分からない核兵器を持つ国から自国を守るために、核兵器を保有する国が存在します。その連鎖を広げないために活動する人の努力に耳を傾け、今後は私達が被爆国当事者として伝え続けなければいけません。

次に印象深かったのは、平和祈念式典です。式典には多くの国の大使が参加しました。しかしパレスチナ自治区に攻撃的な姿勢を見せるイスラエルが招待されなかった事により G7 のほとんどの国が参加しない結果になってしまいました。核を保有すると言われている国だからこそ、是非参加してもらいたかったと私は思います。リスクを避けるためにこの判断をしたのかもしれませんが、平和式典をきっかけに政治的な不和が生まれるべきではありません。この出来事から安全や平和がもろくて、一瞬にして失うかもしれないという危うさを感じます。私達は旅の最終日に街巡りをしました。そこで、式典に出席していた外国の方と遭遇し、お話をしたり一緒に写真を撮ったりして楽しく過ごしました。その時に平和を願う気持ちは、国境を超えて一つだと感じました。世界中が平和という同じ目標にむかって、努力し維持することが大事だと気付かされました。

私達のご先祖様があってこそその存在です。多くの犠牲をはらった今の平和は、決して当たり前ではありません。心から感謝して、これからの明るい未来が壊されないように唯一の原爆被爆国として日本はリーダーシップをとっていくべきだと思います。長崎で平和に対して深く考えを巡らせる機会となりました。ありがとうございました。

長崎平和の旅

上板橋第一中学校 8年 久野 智輝

僕たち 22 名は 8 月 8 日から 8 月 10 日まで 3 日間、長崎平和の旅に参加してきました。長崎平和の旅で過ごした 3 日間は、僕にとって、とても貴重な経験となりました。この平和の旅を通して、僕は思った以上に原爆や戦争は悲惨で、いまある平和は当たり前じゃないことに気付かされました。また、平和について改めて深く考える機会を得ることができました。

一日目は、僕たちが乗ろうと予定していた飛行機が前日の雷雨の影響で欠航になり、急遽五時間かけ、新幹線で博多まで行き、博多から長崎までバスでいく事になりました。なので本当は一日目に行う予定だった、被爆者の方の講話会と青少年ピースフォーラムに参加することができませんでした。とても残念でしたが、二日目からの行事で平和についてしっかりと考えられました。

二日目には、平和公園に向かい、平和祈念式典に参加しました。式典では、戦争で命を失った方々や被爆者の方々に黙とうを捧げました。式典では色々な国の人たちが平和を願って祈りを捧げましたが、世界では、まだ戦争をしている国があり、原爆資料館でみたような光景が繰り返されているかもしれません。一刻も早く戦争が終わってほしいという思いが強くなりました。平和式典のあとには長崎市の歴史と風土について学びました。グラバー邸や大浦天主堂など歴史があり、原爆の被害を受けていない場所を訪れ、戦争が起こる前の長崎の様子を知ることができました。僕は、戦争がもたらした変化について考えさせられました。

三日目には、再び平和公園を訪れ、献花と折り鶴を捧げました。その後、長崎原爆資料館と追悼平和祈念館を見学しました。原爆資料館では、被爆した当時の写真や資料を目の当たりにし、その恐ろしさや悲惨さは、自分が想像していた以上だったことを痛感しました。原爆が落ちた当時の光景の写真を見たときは本当に衝撃的で言葉では表せないほど悲惨で世界でもあんな光景が二度と起きてほしくないと思いました。

僕は、3 日間の平和の旅で平和の重要性を再認識し、戦争の恐ろしさ、原爆の悲惨さについても改めて考えさせられました。そこで二度と戦争を繰り返してはならないという強い思いが生まれました。平和の旅でこの旅で学んだ経験や知識などをより多くの人に伝え、世界で原爆の危機がなくなり、戦争がなくなるように少しでも協力したいです。

「伝える」が持つ力

上板橋第二中学校 8年 松本 菜奈

「戦争なんてしてていいことなんてないのにね。みんなが戦争のことを知ってなくなったらいいのにね。」私達に原爆資料館を案内してくれた平和案内人さんは言った。私は少し悲しくなった。

今回の3日間に渡る平和の旅は波乱万丈だった。飛行機が飛ばなかったり、災害級の暑さの中で行われた平和祈念式典だったり、新たに友となった他校の中学生たちも疲れを見せていた。しかし貴重な被爆者の方のお話や東京では見ることのできない長崎の景色、美しさや儚さが詰まっており、感動を覚えた。大変学びの多い3日間になった。

今回の平和学習で学んだことは多い。原爆のこと、復興までのこと、第二次世界大戦のことなどを学んだ。過去の悲しい原爆の事実を資料館で目の当たりにしたときは参加した皆が「繰り返さないようにするためにもしっかりと学校のみんなに原爆のことを伝えよう」と話し合っていたにも関わらず、私は案内人さんの言葉で自分の無力感を感じた。冒頭の案内人さんは誰よりも原爆のことを理解している。そんな彼が戦争は現実を伝えていくだけではなくないと遠回しに言っているのだ。私達には伝えることしかできないというのに。

原爆のことを教えることで戦争は良くないと思う人はどれだけいるだろうか。原爆のことを知っても戦争をやめない人はいるだろう。現に2021年に記念式典に参列したプーチン大統領は未だにウクライナ侵攻の手を止めない。私は「伝えていくことは本当に大きな意味になるんですか」と聞いた。案内人さんは「一人でも多くの人が原爆が恐ろしいものだとわかってくれたら意味があるよ」と言った。平和の旅に参加した私達にできることは伝えること。ただそれだけだった。「伝える」ことが戦争を止める力には小さすぎて到底及ばないとわかっている。

それでも私達は伝えていかなければならない。それを心に決める旅だった。資料館やあの日のことを聞いて戦争は良くないものだと思う人が一人でも増えるのなら、伝えるということは小さくても確実な力になるのかもしれない。平和案内人さんも私達もあの日のことを忘れてはならないと伝えていく。それが平和につながる小さくても確実な一歩なのだとわかる旅になった。

「長崎を最後の被爆地に」

上板橋第三中学校 8年 菊池 倫加

今から79年前の8月9日、長崎の上空500mで一発の原爆が炸裂しました。その時、その瞬間、多くの人々の暮らしは奪われました。多くの人の尊い命も失われました。その後日本は敗戦し、平和主義となり、軍隊、兵器を持たない国となりました。それ以後、日本は戦争をしていません。このようにして現在日本は、戦争と身近でなくなっていますが、世界では未だに戦争をしている国、地域があります。そんな今だからこそ私は、平和について考えたいと思い、今回この平和の旅に参加しました。

私達は、2日目、長崎平和祈念式典に参列しました。そこでは、長崎市長や被爆体験者、岸田総理をはじめ、多くの方が挨拶をされました。その時多く耳にした言葉が「長崎を最後の被爆地に」です。今世界では一説によると12120発もの原爆があると言われています。しかし、実戦に使われたのはたった二発だけです。それだけでも甚大な被害を受けました。更に今は、その二発の原爆が投下されてから、79年も経っていて、それらの何倍も強力なものもたくさんあります。これから原爆が使われるようなことがあれば、人類が滅亡するかもしれません。そう考えると私は怖くなりました。そうはならないためにも、何としてでも大切に、そして守らなければ行けない言葉だと思いました。

3日目に訪れた原爆資料館では、その時を語る展示をたくさん見ました。11時2分で止まったままの時計、焼け野原と化している長崎の白黒の写真、背中に大きく残ったやけど痕の写真、全壊した浦上天主堂の復元模型。どれも重すぎるものでした。こんなことが何の得になるの？と私は強くおもいました。原爆の悲惨さ、恐ろしさは想像以上で、世界でもう二度と起きてはいけないことであることだと考えさせられた1日でした。

私は、この3日間本当に貴重な体験が出来ました。今世界では、戦争が起きています。ウクライナとロシア、イスラエルとパレスチナ。どちらもお互いに正義があり、争いが起きています。しかし、戦争によって、平和に暮らしていた罪のない人々の暮らしを奪うということは、あってはいけません。私はこの旅で、平和について、原爆について知った他に、今世界で起きている戦争に対する見方も変わりました。世界平和を祈るとともに、これから今回の経験をもとに原爆の恐ろしさ、平和の尊さを多くの人々に伝えていきたいです。

人間の愚かさと強さ

桜川中学校 8年 青木 彩和

1945 年のあの日、長崎に住んでいた人々はお昼ご飯の支度をしたり学校に通ったりしていました。皆普段通り過ごしていましたが、午前 11 時 2 分にその日常が壊されました。松山町上空で眩しい閃光が走った次の瞬間、爆風が町と町の皆を襲いました。当時木造建築が多かったため、お昼ご飯を作るための火が爆風により家に燃え移ってしまい、あたりは焼け野原になったのです。放射線、熱線の影響で、人々の皮膚はただれ、まさに地獄だったそうです。私は、このようなことが実際に約 80 年前にあったことが正直信じられませんでした。ですが、この悲惨な出来事を忘れ去ってはならないと考え、今回実際に原爆が投下された長崎に行って気づいたことをみんなに伝えたいと思い、平和の旅に参加しました。

1 日目は前日の雷雨の影響で長崎まで新幹線とバスで 1 日かけて移動をしました。バスガイドさんのおはなしを聞いて、原爆について少しだけでもわかったような気がしました。2 日目は、平和祈念式典に参列したり、被爆者の話を聞いたりして当時のことを想像し、胸が苦しくなりました。今も被爆者は原爆の恐ろしさが忘れられてしまわないように伝える活動を続けていますが、原爆が投下されて 79 年がたち、原爆のことを知らない、考えていない人が多くなってきているのだろうと感じます。私は、今不自由なく暮らせているという日常に感謝しなければいけないことを、被爆者のスピーチで学ぶことができました。多くの人に実際に被爆地を訪れたり、話を聞く機会をもってもらいたいと感じました。3 日目は、長崎原爆資料館に行きました。原爆によって亡くなってしまった女学生の燃えてしまった弁当や、被害にあった当時の学生の服を見て、起こったことを想像し、核の威力や被害について知ることができました。核爆弾の模型を見て、たった 2 メートルほどの核爆弾が 3 キロメートルにも及ぶ被害をもたらしたり、放射線や熱風による後遺症を残していることにとっても驚きました。

3 日間を通して私は、戦争を起こしてしまう、大量破壊兵器を開発してしまう人間の愚かさを感じました。今でもまだ、核兵器を持っている国が存在していることに嫌気が差しています。今すぐにこの地球上から核兵器をなくして少しでも脅威を排除してほしいと思います。それと同時に、あれほどの被害を受けても復興のために立ち上がる人間の強さを感じました。私も長崎の人々のように諦めず、進み続けることを大切に、これからの一日一日を有意義に過ごして行きたいです。私が長崎で体験したことを多くの人に伝えていきたいと思いました。

長崎の旅を終えて

赤塚第一中学校 8年 橋本 千穂

1945 年、今から 79 年前の 8 月 9 日午前 11 時 2 分、長崎県長崎市で一瞬にしてたくさんの尊い命が奪われました。

私は今回の中学生長崎平和の旅で平和の尊さそして大切さを知りました。そこで私が体験してきて印象に残ったことをいくつか紹介します。

1 つ目は平和祈念式典です。平和祈念式典では、被爆者の方が原爆の悲惨さや原爆症などの辛い当時のことを話していました。耳を傾けている私には本当に苦しくなるほどでした。被爆者の方々は「世界中の誰にも二度と同じ体験をさせない」という強い決意で現在、若者や世界中の人々に自身の体験談を話し続けています。にも関わらず、未だ世界のどこかで核兵器が作られています。長崎市はこう語っています「ここ被爆地長崎を最後の被爆地に」と。長崎は平和のために核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けてこのような取り組みをしていました。

2 つ目は平和公園です。私は平和の旅へ行く前の事前学習として平和祈念像について調べました。天を指した右手は原爆の脅威を、水平に伸ばした左手は平和を、軽く閉じた目は戦争犠牲者の冥福を祈っている、という意味が込められています。そして平和の泉の石碑には「水がほしい」という内容が書かれたある少女の日記が刻まれています。私はこれを見て、今は欲しいときに欲しいだけ水をもらえるけど当時は水が一滴も飲めないという状況を知り苦しさを知りました。

3 つ目は長崎原爆資料館・追悼平和祈念館です。ここでは平和案内人の方が長崎の原爆や平和について説明してくださいました。その中で、展示してある写真はとても残酷なもので野原で焼け死んでしまっている人や一生懸命水を探している人もいました。

最近、戦争の話もニュースでよく流れるようになってきました。原爆資料館でも見ましたが、今もなおたくさんの国が核兵器を製造しそして所持しているそうです。このような現実には絶対に止めなければなりません。そのためにも私達若者が先陣を切って伝えていこうと思います。まず、長崎平和の旅で学んだことを家族や友達に伝えて平和の尊さ・大切さを知ってもらうことから始めていこうと思います。そして中学生長崎平和の旅で学んだことを活かして、みんなが健康で安心安全に過ごせる権利をもっと世界に広めていきたいです。

受け継いでいく平和

赤塚第二中学校 8年 下見 瑠花

「peace is a world heritage shared by all humankind」

平和は人類共通の世界遺産である

これは平和記念式典で被爆者代表の三瀬清一郎さんがおっしゃられた平和への誓いの言葉です。私はこの言葉を聞いて平和の尊さや平和な世界を実現し、それを受け継いでいくことが大切だと思いました。私はこの長崎平和の旅で戦争の悲惨さを感じ、平和をつなぐために大切な事がわかりました。

平和式典で合唱された曲「千羽鶴」は、原爆被爆50周年を記念して作られました。「千羽鶴」は、毎月9日の午前11時2分に長崎市内で放送され、平和の尊さを歌で受け継いでいるとわかりました。

原爆資料館では、ひどいやけどを負った兵士の写真、溶けた骨がくっついた洋服、辺り一面に焼死体がある写真を見てとても心が痛みました。私が特に心に残ったのは、黒焦げの弁当箱です。お昼前のいつもと変わらない日常に突然原爆が落ちたことを痛感しました。原爆資料館を見学した時、語り部の方に被爆者の遺品のこと、当時の悲惨なお話をいただきました。

被爆者の平均年齢が85歳を上回り、当時のことを語れる方が減ってきています。また被爆者が原爆資料館に寄贈した遺品の劣化が進み、レプリカを展示することが増えて、本物の遺品を見ることができなくなってきています。

そのため次世代に平和の尊さを受け継ぐことが難しくなってるのです。

私は今まで日本は平和だから大丈夫と思い、世界で起きている戦争を他人事と感じていました。しかし被爆地で平和記念式典へ参列、原爆資料館の見学を通し、平和は当たり前ではないことを強く感じました。被爆者の方々が中心になり、平和の尊さや戦争の悲惨さを次世代に伝えていってくださっていることにありがたく思いました。今度は被爆者の気持ちを受け継いで私達が伝えていく番です。一人ひとりが学校の授業や戦争に関する映画等を通じて、戦争の悲惨さについて学び、79年前に起こった悲劇を忘れてはいけません。戦争に使用された核兵器一つで何万人という命が失われ、生き残った被爆者は大切な人を失っても生きていけないといけないという残酷な気持ちや被爆により負った怪我、原爆症による健康不安を抱えて過ごしていかなければなりません。私達はこれらの過去の悲しい出来事から目を背けず学び続け、次の世代が受け継いでいくことが大切なのです。

平穏な未来へ

赤塚第三中学校 8年 吉田 レナ

この子達を抱きしめてあげられたら良いのに。
私が原爆資料館に参加して強く思ったことだ。

私は長崎平和の旅に参加する前は「原爆」という単語が遠いものに感じ、全身の皮膚がただれていたと聞いてもイメージすることができなかった。被爆国で生まれた身として原爆の怖さを説明できるようにならないといけないと思い、長崎平和の旅に参加した。二日目は平和祈念式典に参加して原爆は私達が普段過ごしているような何気ない日常を奪うことを実感することができた。しかし、どうしても原爆当時の苦しみや人々の気持ちをイメージすることができなかった。このまま長崎平和の旅が終わってそのまま帰ることになってしまうのかという気持ちを抱きながら最終日に原爆資料館へ足を運んだ。そこには沢山の遺品などが置いてあり、一つ一つをじっくり見ることができた。すると、一枚の大きな写真から、「死にたくない」という思いを受け取った。その写真は当時13歳の少年が原爆によって炭と化したものだった。体は真っ黒で表情はわからなかった。けれど手足はハッキリとしていて右手は胸を抑えていた。以前、被爆者の方の話を聞いたことがあり、その時はその方の苦しみをイメージすることが難しかった。しかし実際に写真を見て、少年と自分を重ね、ひどく胸が締め付けられた。日常が原爆で絶望に変わる。そんなとき痛みだけでなくどれだけの孤独を感じたんだろう、横で手を握ってくれる人をどれだけ望んだことだろう。そう思えた瞬間、私は被爆してしまったすべての子供を抱きしめて、安心させてあげたい気持ちになった。そう感じてからは原爆資料館のもの全て、見ると胸が一杯になってしまっていて資料館を進む足取りが重くなった。

戦争は誰も幸せにはできない。私が長崎平和の旅で学んだことだ。先の未来、戦争が一切ないなんてことは今のままだと無理かもしれない。けれど、一度は考えてみてほしい、本当に戦争しか道はないのかということ。私は戦争以外の道をみんなが探すようになったら、対話で解決できると思う。そうするために私はまずは自分から変わっていかうと思う。そうしてだんだん沢山の人々に平和の大切さを伝えていこうと思う。

平和の大切さ

高島第一中学校 8年 富樫 椋

私が今回の「中学生長崎平和の旅」で一番記憶に残っていることは平和祈念式典での長崎県の鈴木市長と被爆者代表の方の話です。

鈴木市長からは核兵器廃絶へ向けての話でした。長崎平和宣言の中で「一人ひとは微力であっても、無力ではありません。私たち地球市民が声を上げ、力を合わせれば、今の難局を乗り越えることができる。国境や宗教、人種、性別、世代などの違いを超えて知恵を出し合い、つながり合えば、私たちは思い描く未来を実現することができる。」と話していました。私はこの言葉を聞き、みんなで違いを受け入れ合いながら協力することが平和につながり、平和を守り、保つことができるようになるのだと思いました。

被爆者の方の話は長崎に原爆が投下されたあとのことでした。突然ピカッと眩しく光り爆風が吹き抜けていったそうです。当時被爆者の方が通っていた学校の体育館には怪我をした人たちが運ばれてきていたそうですが、手当てなどはされずにただ横に寝かされていき、息絶えた人は校庭へ運ばれて焼かれたそうです。「自分の学校が死体処理場になった光景は、今でも忘れることができません」と話していました。この話を聞き、もう二度と繰り返してはいけない戦争の酷さや被爆者の方々は今でも苦しんでいることを改めて感じました。

私は長崎平和の旅でたくさんのことを経験することができました。平和祈念式典など、こういう機会がなければ参加することができないようなものを経験することができ、平和への理解を深めることができました。私はこの3日間の長崎平和の旅を通して思ったことがあります。私は2泊3日でたくさんの友達を作ることができました。同じ地域に住んでいる同学年の中学生22名ですが、最初は顔や名前を知らない子しかいませんでした。しかし「よろしくね。」と話しかけたら「よろしく。」とみんなが返してくれて、いろいろなことを経験していく中でどんどん仲良くなることができました。初日に長時間かけて長崎へ到着したこと、食事を一緒にとったこと、部屋で一緒に過ごしたこと、夜のミーティングなど、すべてがよい経験となりました。私はこのようにお互いのことを知ろうとして歩み寄っていくことが、平和へ繋がることだと思いました。人種や宗教など違いはあるけれど、それらを乗り越えてお互いの考え方や思いなどを受け入れ合っていくことができれば、世界は平和になると思います。これは私達が普段していることですが、多くの人が積み重ねていくことで輪が広がっていき、世界中が受け入れ合いながら生きていくことができれば戦いや争いがなくなっていくと信じています。

世界へ、そして未来へ

高島第二中学校 8年 小野 こゆき

「どんなに陰しくても、軍拡や威嚇を選ぶのではなく、対話と外交努力により平和的な解決への道を探ることを求めます。」これは、長崎平和宣言で最も印象に残った言葉です。

私は、核兵器を保有することによって国家間の戦争を思いとどまらせる事は難しいと思います。核兵器が使用される可能性がある限り、戦争は無くならないと考えるからです。

国家間の問題は、話し合いで平和的に解決できるような世界を目指すべきです。そしてそれは、唯一の被爆国である日本が積極的に世界に訴えていくべきだと思います。

長崎平和宣言では、「地球市民」という言葉が使われていました。人種、国籍、思想、歴史、文化、宗教などの違いを乗り越え、誰もがその背景によらず人として尊重される社会の実現を目指して活動する人々を示す造語です。私はこの言葉に感動しました。同じ地球に住む人間同士、話し合えば必ずわかりあえるはずです。核兵器を手放し、握手できる世界はいつかきっと実現します。

そのために私ができる事はなんだろう、そう考えた時、長崎平和祈念式典の司会や会場の準備を、高校生達がやっていた事に気づきました。被爆者の平均年齢が85歳を超える中、平和への活動は若い世代にきちんと受け継がれていっているのだと感じました。長崎原爆資料館で見た、頭蓋骨の付いたヘルメットや、高熱のため溶けてガラスとくっついた手の骨は、目を背けたくなるほど原爆の恐ろしさを伝えていて、心が痛くなりました。その他にも色々な日用品が残っていて、本当に、79年前の8月9日、普通に生きていた人々が突然、原爆によって命を奪われてしまったのだと実感しました。原爆は、生き残った場合でもその後ずっと放射線障害に苦しむ事になる、本当に残酷な兵器です。もう二度と原爆が使用される事があってはいけないと思いました。

長崎を最後の被爆地にするためには、原爆の悲惨さと平和の大切さを次の世代に伝えていく事が大切だと思います。被爆者代表の三瀬 清一郎さんは、10歳の時の辛い被爆体験を、語り部として若い世代に伝えてくれています。2023年からは英語による活動も始められたそうで、世界へ伝えたい、という思いを感じました。この思いを受け止め、次の世代に繋いでいく事が、今回、平和の旅に参加した私達の使命だと思います。

平和の尊さ

高島第三中学校 8年 吉居 克峻

1945年8月9日11時2分、長崎に原子爆弾が投下され、7万3884人の多くの尊い命と長崎市の街が破壊されました。

僕は今回の平和の旅で貴重な体験をさせていただきました。去年台風で先輩たちが行けなかった平和祈念式典に参加して平和について非常に考えさせられました。僕が平和記念式典に参加して一番印象に残っている話は被爆者代表のスピーチです。

当時10歳の被爆者代表、三瀬さんは、B29の爆音を真似して音を出して遊んでいたところを祖母に止められ、渋々オルガンの蓋を閉めて立ち上がろうとしました。その時、ピカッと眩しい閃光が走り、学校で教わった通り、指で両耳・両目を押さえ、オルガンの前に伏せたそうです。次の瞬間、爆風が家の中を吹き抜け、その間、恐怖に怯えながらじっと堪えていたそうです。原爆の爆風で散らかった家の中を数日かけて片付け、友人と当時通っていた伊良林国民学校に行って見た光景は男女の区別もつかないほど血だらけの人や上半身裸で傷を負った人達が体育館に運ばれ誰かが手当をしたり水を飲ませたりすることもなく、ただ寝かされているだけで、苦しさにわめいている人が急に静かになったと思ったら、既に息絶えており、その人を校庭に運び出し穴を掘り板の上に遺体を載せて焼いており、自分の学校が死体処理場になった光景は、今でも忘れることができないと話していました。たった1発の爆弾で何気ない日常がいつともたやすく壊れてしまうのかと思い、衝撃を受けました。また、原爆が投下後の放射線の影響で原爆症になり、すぐに発症し亡くなってしまう人もいれば、10年20年経って発症してしまうケースもあり、被爆者は毎日原爆症に怯えながら、生きていっているという事実には僕は原爆の危険さとその脅威が忘れられません。

現在の地球には推定1万2121個の核弾頭が保有されています。また、ウクライナやパレスチナなどの戦火は収まるばかりか泥沼化しており多くの尊い命が失われて、核兵器の使用を示唆するなど危険な状況が続いています。今の核兵器は長崎や広島に投下されたものよりもより強化され、より多くの被害が予想されます。長崎を最後の被爆地にするために今、平和についてもう一度考え直し、伝えることが平和に近づくと考えます。

最後に、このような機会をくださった板橋区職員の方々、引率してくださった先生方、本当にありがとうございました。

第3部 資料編

広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式

HIROSHIMA PEACE MEMORIAL CEREMONY

令和 6 年(2024年) 8 月 6 日

August 6, 2024

広 島 市

The City of Hiroshima

式次第

Program

開 式	8 : 00	Opening
原爆死没者名簿奉納 広島市長 遺族代表	8 : 00	Dedication of the Register of the Names of the Fallen Atomic Bomb Victims Mayor of Hiroshima Representatives of the bereaved families
式 辞 広島市議会議長	8 : 03	Address Chairperson of the Hiroshima City Council
献 花 広島市長 広島市議会議長 遺族代表・こども代表 被爆者代表 来 賓	8 : 08	Dedication of Flowers Mayor of Hiroshima Chairperson of the Hiroshima City Council Representatives of the bereaved families and children Representatives of the atomic bomb survivors Distinguished guests
黙とう・平和の鐘	8 : 15	Silent Prayer and Peace Bell
平和宣言 広島市長	8 : 16	Peace Declaration Mayor of Hiroshima
放 鳩		Release of Doves
平和への誓い こども代表	8 : 24	Commitment to Peace Children's representatives
あいさつ 内閣総理大臣 広島県知事 国際連合事務総長	8 : 29	Addresses Prime Minister of Japan Governor of Hiroshima Secretary General of the United Nations
ひろしま平和の歌（合唱）	8 : 46	Hiroshima Peace Song (chorus)
閉 式	8 : 50	Closing

平 和 宣 言

皆さん、自国の安全保障のためには核戦力の強化が必要だという考え方をどう思われますか。また、他国より優位に立ち続けるために繰り広げられている軍備拡大競争についてどう思いますか。ロシアによるウクライナ侵攻の長期化やイスラエル・パレスチナ情勢の悪化により、罪もない多くの人々の命や日常生活が奪われています。こうした世界情勢は、国家間の疑心暗鬼をますます深め、世論において、国際問題を解決するためには拒否すべき武力に頼らざるを得ないという考えが強まっていないでしょうか。こうした状況の中で市民社会の安全・安心を保つことができますか。不可能ではないでしょうか。

平和記念資料館を通して望む原爆死没者慰霊碑、そこで祈りを捧げる人々の視線の先にある原爆ドーム、これらを南北の軸線上に配置したここ平和記念公園は、施行から今日で75年を迎える広島平和記念都市建設法を基に、広島市民を始めとする平和を願う多くの人々によって創られ、犠牲者を慰霊し、平和を思い、語り合い、誓い合う場となっています。

戦後、我が国が平和憲法をないがしろにし、軍備の増強に注力していたとしたら、現在の平和都市広島は実現していなかったのです。この地に立てば、平和を愛する世界中の人々の公正と信義を信頼し、再び戦争の惨禍が起こることのないようにするという先人の決意を感じることができるはずです。

また、そうした決意の下でヒロシマの心を発信し続けた被爆者がいました。「私たちは、いまこそ、過去の憎しみを乗り越え、人種、国境の別なく連帯し、不信を信頼へ、憎悪を和解へ、分裂を融和へと、歴史の潮流を転換させなければなりません。」これは、全身焼けただれた母親のそばで、皮膚がむけて赤身が出ている赤ん坊、内臓が破裂して地面に出ている死体…生き地獄さながらの光景を目の当たりにした当時14歳の男性の平和への願いです。

1989年、民主化に向けた市民運動の高まりによって、東西冷戦の象徴だったベルリンの壁が崩壊しました。かつてゴルバチョフ元大統領は、「われわれには平和が必要であり、軍備競争を停止し、核の恐怖を止め、核兵器を根絶し、地域紛争の政治的解決を執拗に追求する」という決意を表明し、レーガン元大統領との対話を行うことで共に冷戦を終結に導き、米ソ間の戦略兵器削減条約の締結を実現しました。このことは、為政者が断固とした決意で対話をするならば、危機的な状況を打破できることを示しています。

皆さん、混迷を極めている世界情勢をただ悲観するのではなく、こうした先人たちと同様に決意し、希望を胸に心をつにして行動を起こしましょう。そうすれば、核抑止力に依存する為政者に政策転換を促すことができるはずです。必ずできます。

争いを生み出す疑心暗鬼を消し去るために、今こそ市民社会が起こすべき行動は、他者を思いやる気持ちを持って交流し対話することで「信頼の輪」を育み、日常生活の中で実感できる「安心の輪」を、国境を越えて広めていくことです。そこで重要になるのは、音楽や美術、スポーツなどを通じた交流によって他者の経験や価値観を共有し、共感し合うことです。こうした活動を通じて「平和文化」を共有できる世界を創っていきましょう。特に次代を担う若い世代の皆さんには、広島を訪れ、この地で感じたことを心に留め、幅広い年代の人たちと「友好の輪」を創り、今自分たちにできることは何かを考え、共に行動し、「希望の輪」を広げていただきたい。広島市は、世界166か国・地域の8,400を超える平和首長会議の加盟都市と共に、市民社会の行動を後押しし、平和意識の醸成に一層取り組んでいきます。

昨年度、平和記念資料館には世界中から過去最多となる約198万人の人が訪れました。これは、かつてないほど、被爆地広島への関心、平和への意識が高まっていることの証しとも言えます。世界の為政者には、広島を訪れ、そうした市民社会の思いを共有していただきたい。そして、被爆の実相を深く理解し、被爆者の「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」という平和への願いを受け止め、核兵器廃絶へのゆるぎない決意を、この地から発信していただきたい。

NPT（核兵器不拡散条約）再検討会議が過去2回続けて最終文書を採択できなかったことは、各国の核兵器を巡る考え方に大きな隔たりがあるという厳しい現実を突き付けています。同条約を国際的な核軍縮・不拡散体制の礎石として重視する日本政府には、各国が立場を超えて建設的な対話を重ね、信頼関係を築くことができるよう強いリーダーシップを発揮していただきたい。さらに、核兵器のない世界の実現に向けた現実的な取組として、まずは来年3月に開催される核兵器禁止条約の第3回締約国会議にオブザーバー参加し、一刻も早く締約国となっていただきたい。また、平均年齢が85歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩に寄り添い、在外被爆者を含む被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆79周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、改めて被爆者の懸命な努力を受け止め、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。皆さん、希望を胸に、広島と共に明日の平和への一步を踏み出しましょう。

令和6年（2024年）8月6日

広島市長 松 井 一 實

August 9, 2024

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

The 79th Nagasaki Peace Ceremony

式 次 第		Program
開 式	1 0 : 4 5	Commencement
原爆死没者名奉安	1 0 : 4 6	Laying to rest of the list of victims who died during the past year
式 辞	1 0 : 4 8	Opening Address
献 水	1 0 : 5 2	Water offering
献 花	1 0 : 5 4	Flower offering
黙 と う	1 1 : 0 2	Silent prayer
長崎平和宣言	1 1 : 0 3	Nagasaki Peace Declaration
平和への誓い	1 1 : 1 2	Pledge for Peace
児 童 合 唱	1 1 : 1 9	Children's chorus
来 賓 挨 拶	1 1 : 2 4	Addresses
合唱 千羽鶴	1 1 : 4 0	Chorus "A Thousand Paper Cranes"
閉 式	1 1 : 4 5	Closing words

目	次
会場案内図……………	1 ページ
司 会 者 名……………	2
献水の採水場所……………	2
原爆死没者名簿登載者数……………	2
式 辞……………	3 ～ 4
長崎平和宣言……………	5 ～ 8
平和への誓い……………	9 ～ 10 ページ
児 童 合 唱……………	11
千羽鶴（歌）……………	12
長崎市民平和憲章……………	13 ～ 14
長崎平和宣言＜ことばの解説＞…	15 ～ 18
平和祈念式典会場周辺図………	19

長崎平和宣言

原爆を作る人々よ！
しばし手を休め 眼をとじ給え
昭和二十年八月九日！
あなた方が作った 原爆で
幾万の尊い生命が奪われ
家 財産が一瞬にして無に帰し
平和な家庭が破壊しつくされたのだ
残された者は
無から起ち上がらねばならぬ
血みどろな生活への苦しい道と
明日をも知れぬ“原子病”の不安と
そして肉親を失った無限の悲しみが
いついつまでも尾をひいて行く

これは23歳で被爆し、原爆症と闘いながらも原爆の悲惨さを訴えた長崎の詩人・福田須磨子さんが綴った詩です。

家族や友人を失った深い悲しみ、体に残された傷跡、長い年月を経ても細胞を蝕み続け、様々な病気を引き起こす放射線による影響、被爆者であるが故の差別や生活苦。原爆は被爆直後だけでなく、生涯にわたり被爆者を苦しめています。

それでも被爆者は、「世界中の誰にも、二度と同じ体験をさせない」との強い決意で、苦難とともに生き抜いた自らの体験を語り続けているのです。

被爆から79年。私たち人類は、「核兵器を使ってはならない」という人道上の規範を守り抜いてきました。しかし、実際に戦場で使うことを想定した核兵器の開発や配備が進むなど、核戦力の増強は加速しています。

ロシアのウクライナ侵攻に終わりが見えず、中東での武力紛争の拡大が懸念される中、これまで守られてきた重要な規範が失われるかもしれない。私たちはそんな危機的な事態に直面しています。

福田さんは詩の最後で、こう呼びかけました。

原爆を作る人々よ！
今こそ ためらうことなく
手の中にある一切を放棄するのだ
そこに初めて 真の平和が生まれ
人間は人間として蘇ることが出来るのだ

核保有国と核の傘の下にいる国の指導者の皆さん。核兵器が存在するが故に、人類への脅威が一段と高まっている現実を直視し、核兵器廃絶に向け大きく舵を切るべきです。そのためにも被爆地を訪問し、被爆者の痛みと想いを一人の人間として、あなたの良心で受け止めてください。そしてどんなに陰しくても、軍拡や威嚇を選ぶのではなく、対話と外交努力により平和的な解決への道を探ることを求めます。

唯一の戦争被爆国である日本の政府は、核兵器のない世界を真摯に追求する姿勢を示すべきです。そのためにも一日も早く、核兵器禁止条約に署名・批准することを求めます。そして、憲法の平和の理念を堅持するとともに、北東アジア非核兵器地帯構想など、緊迫度を増すこの地域の緊張緩和と軍縮に向け、リーダーシップを発揮することを求めます。

さらには、平均年齢が85歳を超えた被爆者への援護のさらなる充実と、未だ被爆者として認められていない被爆体験者の一刻も早い救済を強く要請します。

世界中の皆さん、私たちは、地球という大きな一つのまちに住む「地球市民」です。

想像してください。今、世界で起こっているような紛争が激化し、核戦争が勃発するとどうなるのでしょうか。人命はもちろんのこと、地球環境にも壊滅的な打撃を与え、人類は存亡の危機に晒されてしまいます。

だからこそ、核兵器廃絶は、国際社会が目指す持続可能な開発目標（SDGs）の前提ともいえる「人類が生き残るための絶対条件」なのです。

ここ長崎でも、核兵器のない世界に向けて、若い世代を中心とした長年の動きがさらに活発になっています。今年5月には、若者版ダボス会議と呼ばれる国際会議「ワン・ヤング・ワールド」の平和をテーマとした分科会が、初めて長崎で開催されました。

世界の若い世代が主役となって連帯し、行動する輪が各地で広がっています。それは、持続可能な平和な未来を築くための希望の光です。

平和をつくる人々よ！

一人ひとは微力であっても、無力ではありません。

私たち地球市民が声を上げ、力を合わせれば、今の難局を乗り越えることができる。国境や宗教、人種、性別、世代などの違いを超えて知恵を出し合い、つながり合えば、私たちは思い描く未来を実現することができる。長崎は、そう強く信じています。

原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の誠を捧げます。

長崎は、平和をつくる力になろうとする地球市民との連帯のもと、他者を尊重し、信頼を育み、話し合いで解決しようとする「平和の文化」を世界中に広めます。そして、長崎を最後の被爆地にするために、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けてたゆむことなく行動し続けることをここに宣言します。

2024年（令和6年）8月9日

長崎市長 鈴木史朗

板橋区平和都市宣言記念事業

○中学生平和の旅

次代を担う中学生の皆さんに被爆地である広島及び長崎に訪れていただき、平和式典や広島市及び長崎市主催の平和事業への参加を通じて、平和について考えていただくものです。

○平和絵画・原爆展、平和展

次代を担う小・中学生が「平和と戦争」をテーマに描いた、絵画・ポスターの優秀作品、戦災関係資料等を展示しています。今年度は「平和絵画・原爆展」は8月9日から区役所本庁舎及び赤塚支所で開催、「平和展」は3月10日の東京都平和の日にあわせて区内商業施設等で開催いたします。

○板橋平和のつどい

毎年11月上旬に区立文化会館大ホールで実施しています。内容は参加者全員による「板橋区平和都市宣言」の朗読、中学生平和の旅に参加した皆さんの体験発表、朗読会や映画の上映等を行っています。

○板橋の空襲資料映像「板橋の空襲～語り継ぐあの日のこと～」

平成20年度に作製した、板橋の空襲資料映像「板橋の空襲～語り継ぐあの日のこと～」の動画が下記により視聴できます。是非ご覧ください。

①板橋区ホームページから

トップページ ⇒ 区のできごと「動画配信サービス」 ⇒ 「総務課チャンネル」

②URL

<http://www.youtube.com/watch?v=pnnWgh97To8>

※QRコード読み取り機能のある携帯電話・

スマートフォンをお持ちの方は、こちらから→



刊行物番号 R06-84

編集・発行 板橋区平和都市宣言記念事業実行委員会
(板橋区・板橋区議会)

事務局 板橋区総務部総務課総務係
東京都板橋区板橋二丁目66番1号
TEL03-3579-2052

世界の平和は区民の願い

